Study Series No. 81 *February 2024*

国内所蔵の西洋古典籍をいかに活かすか

―早稲田大学図書館所蔵コルヴェア文庫所収の貴重書を中心に―

Comment utiliser la littérature classique occidentale archivée au Japon : études de cas à partir des livres rares de la collection Corvaia (bibliothèque de l'université Waseda)

How to make use of Western classical literature archived in Japan : focusing on rare books from the Corvaia Collection at Waseda University Library

福島知己・雪嶋宏一・坂倉裕治
Tomomi FUKUSHIMA, Koichi YUKISHIMA, Yuji SAKAKURA

一橋大学社会科学古典資料センター
Center for Historical Social Science Literature
Hitotsubashi University

国内所蔵の西洋古典籍をいかに活かすか

―早稲田大学図書館所蔵コルヴェア文庫所収の貴重書を中心に―

Comment utiliser la littérature classique occidentale archivée au Japon :
études de cas à partir des livres rares de la collection Corvaia
(bibliothèque de l'université Waseda)

How to make use of Western classical literature archived in Japan :
focusing on rare books from the Corvaia Collection
at Waseda University Library

福島知己・雪嶋宏一・坂倉裕治

Tomomi FUKUSHIMA, Koichi YUKISHIMA, Yuji SAKAKURA

目次

はじめに ～図書館大型コレクションと思想史研究 …… 小関　武史　5

文庫とその周辺 ── Corvaia, Bernstein, Gerits …… 福島　知己　8

コルヴェア文庫の 1649 年
── コルヴェアによるマザリナード文書の収集 ── …… 雪嶋　宏一　22

旧体制（アンシャン・レジーム）下フランスにおける非正規本
── リヨンで印刷されたエルヴェシウスの作品の場合 ── …… 坂倉　裕治　38

総括討論…… 54

Table des matières

Avant-Propos …… Takeshi KOSEKI　5

La collection et ses alentours :
Corvaia, Bernstein, Gerits …… Tomomi FUKUSHIMA　8

L'année 1649 dans la collection Corvaia :
les Mazarinades collectionnées par la famille Corvaia …… Koichi YUKISHIMA　22

Les publications clandestines en France sous l'Ancien Régime :
le cas des versions illicites des œuvres d'Helvétius imprimées à Lyon
…… Yuji SAKAKURA　38

Discussion …… 54

Table of contents

Foreword …… Takeshi KOSEKI　5

The collection and its surroundings :
Corvaia, Bernstein, Gerits …… Tomomi FUKUSHIMA　8

The year of 1649 in the Corvaia Collection :
the Mazarinades collected by the Corvaia family …… Koichi YUKISHIMA　22

Clandestine publications in France under the Ancien Régime :
the case of illicit versions of the Helvétius' Works printed in Lyon
…… Yuji SAKAKURA　38

Discussion …… 54

ミニ・シンポジウム

国内所蔵の西洋古典籍をいかに活かすか

―早稲田大学図書館所蔵コルヴェア文庫所収の貴重書を中心に―

日本国内の大学図書館などには数多くの西洋古典籍が所蔵されています。それらを有効活用することで、実りある研究を進める余地がまだまだあります。

このシンポジウムでは、早稲田大学が所蔵するコルヴェア文庫（15 世紀から 19 世紀に及ぶ、政治、経済、哲学に関わるフランス語の古典籍や掲示物など約 1 万点からなる大型コレクション）に収録された貴重書を中心としつつ（必要に応じてほかの図書館に所蔵されている貴重書を組み合わせながら）、国内に所蔵されている貴重書の有効活用に向けた研究事例を紹介します。

参加者の皆様の今後の研究、実務のご参考になりましたら幸いです。

～ Program ～

13:30-13:40　**趣旨説明**

13:40-14:15　**「文庫とその周辺 Corvaia, Gerits, Bernstein」**
福島 知己（帝京大学経済学部准教授）

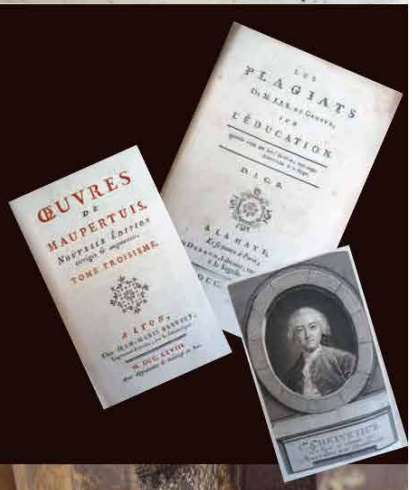
14:15-14:50　**「旧体制下フランスの非正規本：リヨンで印刷されたエルヴェシウスの作品の場合」**
坂倉 裕治（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

14:50-15:05　**- 休憩 -**

15:05-15:40　**「コルヴェア文庫における 1649 年」**
雪嶋 宏一（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

15:40-16:20　**総括討論**

司会進行　小関 武史（一橋大学大学院言語社会研究科教授）



2022/12/3（土）　**13:30-16:20**（13:15 接続開始）
オンライン開催

参加申込：以下の Web サイトから登録してください
https://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/lecture/

申込期限：2022/11/28（月）

お問合せ：一橋大学社会科学古典資料センター
email : chssl@ad.hit-u.ac.jp　tel : 042-580-8248

主催：「啓蒙の言説圏と浮動する知の境界：貴重書･手稿･デジタル資料を総合した 18 世紀研究」（科研費基盤研究 B）研究グループ

共催：一橋大学社会科学古典資料センター　後援：日本 18 世紀学会　協力：早稲田大学図書館

はじめに ～図書館大型コレクションと思想史研究

Avant-Propos
Foreword

2022 年 12 月 3 日、ミニ・シンポジウム「国内所蔵の西洋古典籍をいかに活かすか―早稲田大学図書館所蔵コルヴェア文庫所収の貴重書を中心に―」がオンライン形式で開催された（主催：「啓蒙の言説圏と浮動する知の境界：貴重書・手稿・デジタル資料を総合した 18 世紀研究」（科研費基盤研究 B）研究グループ、共催：一橋大学社会科学古典資料センター、後援：日本 18 世紀学会、協力：早稲田大学図書館）。本報告書は、その記録である。

私が研究代表者を務める上記科研費基盤 B の研究グループでは、図書館が所蔵する西洋古典籍を思想史研究の現場にどのように活かすかという問題意識に基づいて、研究を積み重ねてきた。その一環として、コロナ禍初年度の 2020 年度を除き、年に一度のペースでシンポジウムを開催した。「書物の記述・世界の記述――書誌が描く 18 世紀啓蒙の世界」（2019 年 12 月 20 日、一橋大学佐野書院）、「西洋古典籍を巡る書誌と資料研究法の現在―『水田文庫貴重書目録補遺；水田珠枝文庫貴重書所収』を中心に」（2022 年 1 月 22 日、オンライン）と来て、これが三回目である。私たちの研究グループは、三つの国内大学図書館での調査に力点を置いた。すなわち、一橋大学社会科学古典資料センター、名古屋大学附属図書館、早稲田大学図書館である。三度のシンポジウムはそれぞれの図書館の蔵書と関連づけて企画したものであり、これで一巡したことになる。

本報告書には、第三回シンポジウムの三つの研究発表をもとにした論文および討論の模様が収録されている。それぞれの概略を以下に示しておこう。

福島知己論文「文庫とその周辺――Corvaia, Bernstein, Gerits」は、コルヴェア文庫の来歴から説き起こす。反王権の自由主義運動に身を投じたコルヴェア男爵は、自ら社会改革を構想するかたわら、書物の収集にも励んだ。19 世紀の初期社会主義思想に力点を置くコルヴェア文庫を、福島論文は「書物でたどる近代フランス経済・社会思想史」と特徴づけている。男爵没後も文献収集は続けられ、文庫は現在の状態になった。そこには遺族の他、ゲーリッツやベルンシュタインといった古書籍商の関与も見られる。そして、コルヴェア文庫が早稲田大学図書館に納入されるに当たって力を尽くしたのも、ゲーリッツとベルンシュタインである。大型コレクションの成立には、西洋古典籍を取り巻くネットワークの存在が大きいのである。福島論文の成果は以上にとどまらない。コルヴェア文庫において特権的な地位を占めるフーリエ主義の文献に着目し、図書館資料のコレクションという形態から出発した思想史研究の実例にもなっている。

雪嶋宏一論文「コルヴェア文庫の 1649 年―コルヴェアによるマザリナード文書の収集―」は、1649 年に出版された文献に注目した論考である。コルヴェア文庫は約一万点の文献から

構成されるが、出版年代に注目すると三つの山が認められる。その最初の山が 1649 年で、これはフロンドの乱の時期に相当する。フランスでルイ 14 世が即位して間もない頃、実権を握ったマザラン枢機卿の支持派と反対派が膨大な文書で応酬を繰り広げたが、それらを総称してマザリナード文書と呼ぶ。雪嶋論文の成果は、コルヴェア文庫には 262 点に及ぶマザリナード文書が含まれていることを明らかにした点にある。それは文献を一点ずつ調査してようやく得られた成果であり、目録にはまだ反映されていない。ある文献の目録を作成する際、それがマザリナード文書であるという印をつけておけば、一括して抽出することも可能である。そうした作業は新たな研究に道を開くであろう。こうして、図書館資料の目録をいかに整備するかという問題が浮き彫りになる。

坂倉裕治論文「旧体制下フランスにおける非正規本―リヨンで印刷されたエルヴェシウスの作品の場合―」は、ある書物がいつ、どこで、誰によって印刷されたかに着目することが思想史研究として成立することの格好の事例となっている。1758 年、エルヴェシウスの『精神論』は出版禁止処分を受ける。しかし、こうした措置は当該作品を抹殺するどころか、危険で魅力的な書物として宣伝する効果をもたらす。その結果、海賊版が制作されることになる。リヨンに拠点を置く印刷業者ブリュイゼは、その手の海賊版を数多く手掛けた。同じタイトルを掲げる作品であっても、正規本と非正規本では内容に異同がある。そのような細部を比較検討することで、書かれたことの読解を超えたレベルで、思想の流通経路などが浮き彫りになる。坂倉論文では、コルヴェア文庫所蔵本と他大学図書館所蔵本、さらに著者所蔵本をもとにして、緻密な検討が重ねられる。モノとしての特性（たとえば紙の透かし）も重要である。ある文献を一点所蔵していれば二点目を購入するに及ばないということにはならないし（それは貴重な非正規本かもしれない）、インターネット上で読めるから実物は要らないということにもならない（画像では紙質を確かめられない）。

以上三つの論文に加えて、シンポジウムにおける討論も文字に起こして収録した。登壇者三名が自身の発表の枠では話せなかったこと、他の発表を聴いて考えたことなどを、かなり踏み込んで展開している。また、研究グループのメンバーである長尾伸一、松波京子両氏から、イギリスの事例についての説明が加えられた。フロアからも図書館職員の方から目録の作成と公開をめぐる問題が指摘された。こうした現場の声が書き留められることには、大きな意味があると思う。

図書館職員の方々が大勢このシンポジウムに参加してくださったことは、私たちの研究グループにとって力強い支えとなった。2019 年度から始まったこの共同研究において、図書館職員と思想史研究者との協力関係をどのようにして構築するかは、常に重要な課題として認識されていた。一朝一夕に可能になるわけではないが、また、予算の裏づけという現実問題が立ちはだかってはいるが、図書館での目録作成と思想史の研究が連携することの意義を認識することが、第一歩になることは間違いない。

過去二回のシンポジウムと同じく、このたびのシンポジウムも一橋大学社会科学古典資料センターの献身的な尽力によって開催することができた。そして、これまた過去二回と同じく、Study Series の一冊として報告書をまとめることができた。発表の場を提供していただいた一橋大学社会科学古典資料センターには、この場を借りて厚く御礼申し上げる次第である。

研究グループを代表して

小関　武史

Takeshi KOSEKI

本研究は JSPS 科研費 JP19H01200 の助成を受けたものです。

文庫とその周辺 ── Corvaia, Bernstein, Gerits[1]

La collection et ses alentours : Corvaia, Bernstein, Gerits
The collection and its surroundings : Corvaia, Bernstein, Gerits

福島　知己
Tomomi FUKUSHIMA

早稲田大学の通称「コルヴェア文庫」は、正式には「フランス経済・社会・思想文庫」を名乗る。その名の通り、フランスの 16 世紀から 19 世紀にかけての社会思想を中心としたおよそ 1 万点からなるコレクションである。早稲田大学はこの文庫を 1988 年に購入し、現在は中央図書館の貴重書室に保存している。本稿では、コルヴェア文庫について考える糸口として、誰がどのようにしてこの文庫をつくったのかを検討したい[2]。そのことを通じて、大学図書館が所蔵する「文庫」を研究する視点について若干の考察をおこなうのが、本稿の目標である。

1．コルヴェアとは誰か

コルヴェアが誰かについては、一見して難しくない。早稲田大学が本文庫を購入する前に販売元である紀伊國屋書店が作成した売り込み用の冊子[3]には、『コルヴェア男爵文庫』と標題がつけられ、文庫がおよそ 1 万冊からなること、それがもともと 19 世紀前半のコルヴェア男爵の収集した資料を起源とすることが記されている[4]。この冊子の記述を頼りにしつつ、『イタリア人伝記事典』などを参照して、コルヴェア男爵についてまとめれば、大略以下のようになる[5]。

---

1 この企画にお誘いくださいました坂倉裕治先生、資料の利用を快くご承諾くださいました早稲田大学図書館貴重書室のみなさまに深く感謝申し上げます。

2 今日の分析書誌学の礎を築いたひとりであるフレッドソン・バウアーズは、『書誌記述の諸原理』において、分析書誌学上の証拠とは物的対象としての書物そのものから得られるものであって、あらゆる外的状況は「副次的証拠」にすぎないと述べている（Fredson Bowers, *Principles of Bibliographical Description*, Princeton University Press, 1949, p. 33）。その意味では、書物についての書誌学的研究として、本稿は副次的証拠を示すものにすぎない。ところで、本稿の課題は「文庫」についての研究であり、その場合は副次的とはいえない。

3 こういう冊子には導入の経緯を探るうえで重要な情報が入っている場合があるので、早稲田大学図書館がこれを処分せず保管していたのは大いに見識のあることといえる。

4 『Corvaia 男爵文庫』紀伊國屋書店、出版年不明。

5 以下、M. Ganci, “Corvaia, Giuseppe Nicola”, *Dizionario Biografico degli Italiani*, vol. 29, 1983 による。以下の電子版がある。https://www.treccani.it/enciclopedia/giuseppe-nicola-corvaia_%28Dizionario-Biografico%29/［2024 年 1 月 21 日最終確認］

コルヴェア男爵はイタリアのシチリア島に起源をもつ貴族の一員である[6]。ジュゼッペ・ニコラス・コルヴァイヤは1785年に、シチリア島のちょうど真ん中にあるカラシベッタという町の男爵家にうまれた。長じて1810年から政治的活動を開始。1820年にカルボナリ党の陰謀事件にかかわり、逮捕され、1822年から24年まで獄中にいた。当時のシチリアは、イタリア統合の以前であり、ブルボン家の流れを汲む王によって支配されていた。フランスで革命が勃発した際にシチリア王国は独立を守ったが、革命運動の息吹はシチリア島にも入ってきており、コルヴァイヤは反王権の自由主義運動に参加したのである。

1824年に国王特赦によって自由の身を得たコルヴァイヤはシチリア島を離れ、ナポリに移って、ワインの醸造をなりわいとした。当時彼は他の醸造家たちと、醸造技術についてだけではなく社会問題なども含めて、かなり自由闊達な議論を交わしていたらしい。仲間との共同醸造事業の企画がナポリ王国の政府の支持を得られずに頓挫したのをきっかけに、パリに移った。おそらくコルヴァイヤの改革構想はそのときすでにできあがっていたと考えられる。1837年にパリで彼は、最初の著作である *Le nouveau monde, projet financier pour arriver à une complète réforme sociale*（訳せば、『新世界、完全な社会改革を到来させるための金融計画』）を発表した。

その後コルヴァイヤはトリノ、ついでミラノに移動し、自説の宣伝を続けた。そして支援者を得て、1840年に主著である *La Bancocrazia o il Gran libro sociale, novello sistema finanziario che mira a basare i governi su tutti gl'interessi positivi dei governati*（『バンコクラツィア』）を2巻本で発表した[7]。

コルヴァイヤはヨーロッパ各地を転々としながら、自説の宣伝を続けた。主な地域に限っても、スイス、パリ、マルセイユ、ナポリ、マルタ、さらに故郷シチリア島のパレルモ、トリノ、ロンドン、ベルギーへと晩年まで次々に移動している。その間、コルヴァイヤはたびたび当局に呼び出された。彼が逮捕されなかったのは、当時の状況において、追放を条件に、身の安全が保証されたからかもしれない。1853年に「千人会」（Società de' millennari）という自説宣伝のための組織の設立を宣言したときも、おそらくこれが秘密結社的と判断され、ピエモンテ州から追放の憂き目を見た。

コルヴァイヤは1859年にパレルモに戻り、翌年死去した。ガリバルディのシチリア征服に続いてイタリアが統一へと向かう最中のことだった。

コルヴァイヤの構想をひとことで言えば、国営の貯蓄金庫を作るという構想である[8]。貯蓄金

---

6 Corvaia（Corvaja の綴りもある）をイタリア語風にコルヴァイアないしコルヴァイヤと読んでもよいが、男爵家がフランス語圏のスイスに住居をもち、長く居住していたことを踏まえ、文庫導入当時に早稲田大学図書館で議論の末、フランス語式の読み方を採用し、「コルヴェア文庫」を日本語名称にしたという。雪嶋宏一先生のご教示による。

7 CiNii Research を使って検索した限りでこの本は日本国内の大学図書館に所蔵がみつけられなかった。ただしドイツ語版が一橋大学のメンガー文庫に入っており、調べた範囲では、これが日本にある唯一のコルヴァイヤの本ということになる。

8 以下 Le baron Corvaja, *Le nouveau monde, projet financier pour arriver a une complète réforme sociale, présenté aux Assemblées nationales de la France et de l'Angleterre, et a tous les autres gouvernemens*, Imprimerie d'Edouard Proux, 1837 による。

庫は、日本で言えば郵便貯金がおこなってきたものを想像すればよいが、勤労者の小口の貯蓄を受け入れることによって生計の安定を促すとともに、その資金を集めて公共事業への融資をおこなうものである。コルヴァイヤによれば、預金者は貯蓄金庫への預金をもとに、いわばクレジットカードのようにして買い物ができるようになるし、利子も得られる。貯蓄金庫側から見ると、タンス預金ではなく資本が集中するので、投資に振り向けられる。コルヴァイヤの構想は、国営の貯蓄金庫によって、民間の銀行のような私的利益を優先した金融活動を牽制でき、さらに国際的に資金を融通し合うことによって、各国の財政を安定させ、国債の速やかな償還に資するというものだった。

そうなってくると、国営貯蓄金庫と切り離された国家独自の役割というものがほぼ消滅するというのが、コルヴァイヤの見立てである。つまり、コルヴァイヤが「バンコクラシー」と呼んでいるのは、国営貯蓄金庫が国家のかわりをなす体制なのである[9]。その意味では「政治」を「経済」ないし「金融」に還元していることになる。

フランスは19世紀前半に銀行制度を発達させた。パリ貯蓄金庫が設立されたのは1818年のことだったが、その後、七月王制下（1830年7月以降のこと）では、金融資本が中心となって、産業の近代化と巨大化が進められた[10]。この時期、鉄道の敷設やさまざまな工場の建設などによって、フランスはそれまでの農業、手工業中心の産業体制からしだいに転換を遂げた。その担い手となった金融資本家「オートバンク」には急激に富が集中することになり、やがて「金融貴族」と呼ばれるほどになった。金融貴族による独占をやめさせるための、いわばオルタナティヴな信用構想として、当時いくつかの銀行構想が提案された。やがて1840年代後半にプルードンのような人物も交換銀行の構想を打ち出し、それをもとにした人民銀行が1849年にごく短期間ながら実現することになる[11]。コルヴァイヤの構想は、このような一連の動きとも関連させて考えることができそうである。

興味深いのは、コルヴァイヤの場合、この構想が、行きすぎた個人主義を廃して利他主義を広め、公共の利益に貢献するという一種の道徳的な実践として描かれていることである。コルヴァイヤは大枠でいうと、自由主義または社会主義の思想に分類される。専制主義への反対という意味では自由主義だし、経済的主張には当時の意味で社会主義的と呼べるものも含まれる。もちろん現代風の語感で社会主義という言葉が意味しているのとは違う。コルヴァイヤは実業家として名を挙げたわけで、その改革構想は、社会事業家とか社会活動家といった言い方が近い。後年、サン＝シモン主義者たちがルイ・ナポレオンの第二帝政のもとで社会や経済の近代化に大きな役割を果たしていくのと同じようなものを感じさせるが、コルヴァイヤがどこま

---

9 Cf. Le baron Corvaïa, *L'emprunt, projet financier présenté a M. Humann*, suivi d'un Catéchisme populaire financier mis à la portée des prolétaires, 2e éd., Delloye, 1841.

10 矢後和彦『フランスにおける公的金融と大衆貯蓄　預金供託金庫と貯蓄金庫 1816-1944』東京大学出版会、1999年、第1章を参照。

11 プルードンの信用改革構想については諸種の文献がある。最近のものとして、髙橋聡「P.-J. プルードンの互酬経済の原理」、『関西大学経済論集』第71巻、2022年。

でサン＝シモン主義の影響から出発したかは別途検討されるべきである[12]。

2．コルヴェア文庫の内容

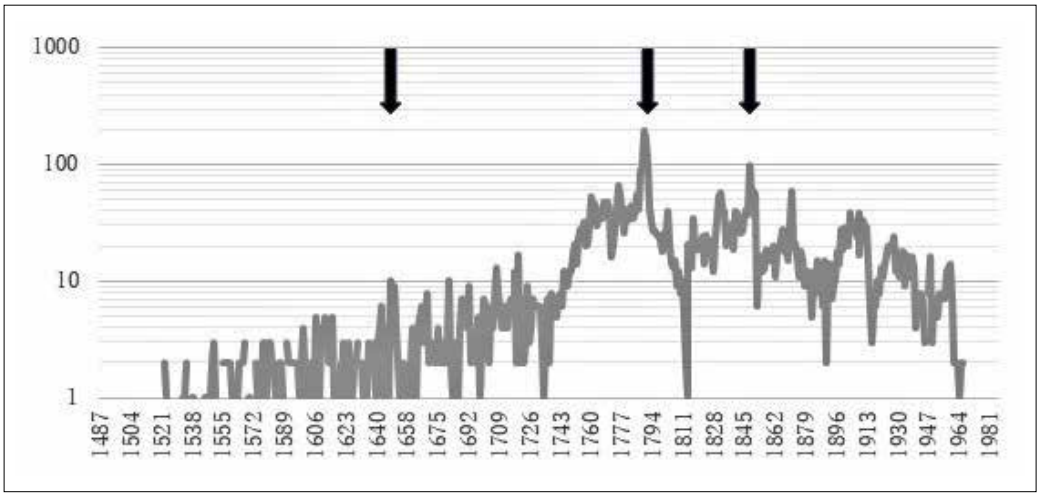
つぎに文庫の内容を簡単にみていこう。

ジュゼッペ・コルヴァイヤ自身の本はこの文庫に含まれない。またイタリア語の本もわずかにすぎない。基本的には、フランス語の文献から構成されている。

冒頭で紹介した紀伊國屋書店作成の提案書には文庫に含まれる資料の点数を著者ごとにまとめたリストが付属されているが、そこで最も多いのはフーリエ主義グループのリーダーだったヴィクトル・コンシデランの著作で 49 点、ついでフランス革命の立役者のひとりミラボー伯爵の著作 40 点、サン＝シモン（いわゆる「空想的社会主義者」のほう）の著作 39 点、18 世紀フランスの経済学者デュポン・ド・ヌムールの著作 37 点、と続く。

時代別に見ると、17 世紀以前の著作は相対的に少ないが、その中では 1640 年～ 50 年前後の作品が比較的目に付く。18 世紀では、重農学派や重商主義など経済学者の文献、慣習法にかかわる文献などもある。全体としては、表 1 のように、1640 年代のマザリナード期、18 世紀後半のフランス革命直前の時期、そして 1848 年の二月革命にむけた時期の著作が多く含まれている。なかでも 19 世紀のいわゆる初期社会主義者（サン＝シモン主義、フーリエ主義、カベ、プルードンなど）の著作が大半を占める。19 世紀後半ではマルクスの『資本論』のフ

表 1　コルヴェア文庫収蔵文献の刊行年別資料数。早稲田大学図書館の蔵書検索サイト WINE（https://waseda.primo.exlibrisgroup.com/）の検索結果をもとに作成。横軸は刊行年、縦軸は資料数の対数表示である。書誌数による統計でありタイトル数や冊数とは異なる場合があるほか、刊行年の記載されていない資料は除いているなど、厳密な正確さを目指したものではないが、おおよその傾向を示す。



[12] 1838 年頃からコルヴァイヤと深い友情を結ぶことになるミケーレ・パルマは、すでに 1835 年にサン＝シモン主義に関する著作を出版したことがあった。

ランス語訳などもあるが、クルノー[13]やワルラスなど数学を利用した経済学者の著作もある。

伝記や著作の特徴から、特に銀行にかかわる文献はコルヴァイヤの関心に直結しているといえる。プルードンらのものだけではなく、デュポン・ド・ヌムールやラヴォワジェなど、18世紀の著者による銀行論も含まれる。

数少ない英語文献では、ホッブズやマルサスの原著が目に付く。

ドイツ人の著作では、フランス語訳だが、カントの『永遠の平和のために』が異彩を放つ。これはそのフランス語版の序文を書いている Charles Lemonnier とのつながりで収集されたとも考えられる。というのは、Lemonnier はサン＝シモンの著作の編者でもあるからで、すなわちサン＝シモン主義の文献を集める過程で収集されたものかもしれない。もっとも、他の接点も考えられる。ヨーロッパ連合の構想は長年の歴史をもつので、その関連で手に入れたかもしれない。実際、Castel de Saint-Pierre の 1713 年の著作『ヨーロッパ恒久平和試論』*Projet pour rendre la paix perpétuelle en Europe* も文庫に含まれている。18 世紀の旅行記も多く含まれるが、それらはトマス･モアの『ユートピア』の関連著作を集める過程で収集されたものと考えられる。同様に、Lahontan の旅行記が収集された理由も、その続編を名乗る著作が Nicolas Gueudeville によって執筆されたからだ、と推測できるかもしれない。Gueudeville は 1715 年にトマス・モアの『ユートピア』のフランス語訳を翻訳出版した人物だからである[14]。

ところで、先ほどのカントの本は 1880 年の本である。また、この文庫には 20 世紀の資料も含まれている。多くは研究文献で、サン＝シモン主義やフーリエ主義をはじめとする 19 世紀の社会主義者についての研究書だったり、あるいはブローデルの『地中海』なども含まれている。コルヴァイヤは 1860 年に死去しているから、これらは本人が収集したものではない。つまり、この文庫は、ジュゼッペ・ニコラス・コルヴァイヤの収集文献以外も含まれる。これが何を意味するかは、後で立ち返ることにしよう。

なお、コルヴァイヤの伝記的事項を説明したときに紹介した「千人会」の構想について、『伝記事典』では、シャルル・フーリエの説に発想したものだと記されているが、管見では特にフーリエの発想と似たものを感じとれなかった。むしろトンマーゾ・カンパネッラの『太陽の都』が連想される。カンパネッラは、17 世紀前半にイタリア南部カラブリアを当時の支配国スペインから解放しようとする運動の首謀者と目されて、投獄された。獄中にあって、トマス・モアの『ユートピア』にも刺激をうけながら独自のユートピア構想を描いたのが、『太陽の都』である。カンパネッラは太陽の都と呼ばれる都市が同心円状の構成をなすと述べているが、千人会も同様の同心円状の構成を重視している。ところで、コルヴェア文庫にはカンパ

---

[13] 1838 年の著作も含まれる。

[14] 森見登美彦の小説『夜は短し歩けよ乙女』を読んだことがあれば、古本市の神を名乗る少年が叫ぶ「本はみんなつながっている」というセリフを思い浮かべるかもしれない。セリフはこう続く。「本たちがみな平等で、自在につながりあっている……。その本たちがつながりあって作り出す海こそが、一冊の大きな本だ」。森見登美彦『夜は短し歩けよ乙女』角川文庫、2008 年、109-111 頁。それは系統樹とは異なる、連想によって広がり、偶然の出会いにも左右されて縦横に展開される世界である。

ネッラの著作を 19 世紀に François Villegardelle がフランス語訳したものが収録されている。Villegardelle による序文を読むと、プラトン、トマス・モア、カンパネッラというユートピア文学の系譜の継承者をサン・シモンやフーリエとみなす考え方を示しており、さらに多くの点でカンパネッラとフーリエに共通点があると述べている。ユートピア思想の延長線上に初期社会主義的な思想を置く考え方は、19 世紀前半にはじめてうまれた[15]。Villegardelle はフーリエ主義の周辺で活躍していた人物なので、ひいきの引き倒しのようなところもあるかもしれないが、当時の認識としてカンパネッラとフーリエの両者を同一平面上で理解する傾向があったかもしれない。

以上を踏まえていえば、このコルヴェア文庫はある種「書物でたどる近代フランス経済・社会思想史」といえるのではないかと思う。その中でも 19 世紀の初期社会主義思想や労働運動にかかわる資料が重視されている。

労働運動にかかわる文献を収集・分析し、ひとつの思想史を描こうという試みは、20 世紀前半、第 1 次世界大戦と第 2 次世界大戦のあいだのいわゆる戦間期に、はじめて組織的に開始された。そのヨーロッパでの中心のひとつはアムステルダムの社会史国際研究所、そしてもうひとつはイタリアのフェルトリネッリ研究所だった。いま法政大学の付属になっている大原社会問題研究所が設立されたのは 1919 年だから、ほぼ同時代の出来事である[16]。

3．コルヴェア文庫の成立事情

すでに述べたとおり、コルヴェア文庫が早稲田大学に入ったのは 1988 年だった。現在の大学図書館はデータベースの利活用に焦点が移っているが、当時は社会科学系の洋書の蔵書数を増やすことがたいへん重視されていた。あらためて言うまでもないが、洋書の輸入は高度経済成長期以降に飛躍的に増大した。その中で、文庫というまとまりで購入するということも起こってきた。一橋大学は 1974 年にバート・フランクリン文庫を購入したし、1977 年には専修大学がミシェル・ベルンシュタイン文庫を購入した。エポックメイキングな年が 1978 年である。というのは、この年から国立大学に社会科学系の洋書（社会科学系には限られないが、ほとんどは社会科学系）をまとめたいわゆる「大型コレクション」の購入が予算化されたからである。当時日本では、いわゆる「黒字減らし」、つまり貿易収支の大幅な黒字を背景に諸外国

[15] 田村秀夫『ユートウピアと千年王国　思想史的研究』中央大学出版部、1998 年の第 1 章を参照。

[16] 社会史国際研究所については機関誌である *Bulletin of the international Institute of Social History* やウェブサイト（https://iisg.amsterdam/［2024 年 1 月 21 日最終確認］）などを参照。フェルトリネッリ研究所は、ジャンジャコモ・フェルトリネッリという、裕福な家庭の出身で共産党に身を投じた人物がつくった研究所である。その息子が記した伝記が日本語に訳されている（カルロ・フェルトリネッリ『フェルトリネッリ　イタリアの革命的出版社』麻生九美訳、晶文社、2011 年）。またウェブサイト（https://fondazionefeltrinelli.it［2024 年 1 月 21 日最終確認］）や、Victoria de Grazia, “The Giangiacomo Feltrinelli Institute”, *International Labor and Working-Class History*, Volume 2, 1972 , pp. 19–21 を参照。

から為替相場の是正を求める圧力が強まったのを躱そうとして、高額な外国産品を買おうとした動きが強まっていたので、その関連もあったと考えられる[17]。初年度の大型コレクションは、北海道大学のヴェルナツキー・コレクションとボリス・スヴァーリン・コレクション、東京大学のマザリナード・コレクション、一橋大学の「近代ヨーロッパ社会科学貴重書」、九州大学のシャルル・ペラ文庫だった。

コルヴェア文庫に話を戻す。この文庫は紀伊國屋書店が早稲田大学に売却したものだが、もともとはデッカー・アンド・ノルドマン書店というヨーロッパの有力な古書店にいたアントン・ゲーリッツという人物が、紀伊國屋書店に話をもちかけたものだった。

ゲーリッツは1930年にオランダのハーグでうまれた。若いときからナイホフという有名な古書店で修行し、稀覯書の担当者として名を挙げた。その後、ロゼンタール書店や、デッカー・アンド・ノルドマン書店などで働き、1981年に独立。息子のアルノウト氏と古書店を経営していたが、2021年12月3日に逝去した[18]。

ゲーリッツ書店は今もアルノウト氏が引継ぎ、経営を続けている。ウェブサイトを見ると、アントン・ゲーリッツが流通にかかわった文庫の数々が掲載されている[19]。先ほど挙げた「大型コレクション」では、ベルンシュタイン文庫、ボリス・スヴァーリン・コレクション、マザリナード・コレクション、シャルル・ペラ文庫。また名古屋大学のドルバック・コレクションもゲーリッツによるものである。1970年代以降の日本の大学図書館の社会科学系洋書の文庫導入にあたってゲーリッツが果たした役割の大きさが垣間見える。

ゲーリッツは日本びいきで、何度も来日したことがあった。1980年に訪日した際に日本古書籍商協会の依頼でおこなった講演が、『日本古書通信』に掲載されている[20]。コルヴェア文庫導入後、1990年10月にも、早稲田大学の招きで来日した[21]。目的はコルヴェア文庫の整理指導と記念展示の準備だった[22]。

---

[17] 戸川継男「スラ研の思い出（第10回）」、『スラブ研究センターニュース』第84号、2001年を参照。「…1978年（昭和53年）という年は、日本政府が「ドル減らし・外貨減らし」を積極的に行なった最初の年であった。この年の9月、政府は経済対策閣僚会議で、ドル減らしのため美術品15億円、洋書5億円の補正予算支出を決定した」。

[18] 以下を参照。https://nvva.nl/in-memoriam-anton-gerits/［2024年1月21日最終確認］

[19] http://www.agerits.nl/about/［2024年1月21日最終確認］

[20]「アムステルダムのゲリッツ氏に聞く　ABAJ講演会」、『日本古書通信』第45巻第9号、1980年。

[21] 以下を参照。「ゲーリッツ氏を招いて」、『ふみくら　早稲田大学図書館報』第28号、1991年2月。『早稲田大学図書館業務報告』第4巻第4号、1990年。Anton Gerits「Views of an European modern and antiquarian bookseller 西ヨーロッパ古書籍業事情および大学図書館員と書籍業者とのかかわり　ヨーロッパ書籍業者の意見」、『早稲田大学図書館紀要』33、1991年。

[22] 洋書整理の仕方を教えてもらうために専門家を招くというやりかたは他にも例がある。一橋大学の場合、先述のバート・フランクリン文庫購入の際、1975年に、ハーバード大学で社会科学資料の蔵書として名高いクレス文庫のキュレーターであったケネス・カーペンター氏を招き、文庫の整理を依頼した。細谷新治「「バート・フランクリン文庫」の調査の思い出」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』第1号、1981年を参照。

ゲーリッツは自伝を著しており、この自伝からコルヴェア文庫売却の詳しい経緯がわかる[23]。それによると、コルヴェア文庫の売却を最初にもちかけたのは、ゲーリッツの古書籍商仲間ミシェル・ベルンシュタインだったという。

ミシェル・ベルンシュタインは1906年にフランスのリヨンで、亡命ロシア人の両親のもとにうまれた。彼の父親の本名はLeonidだが、亡命後フランス語風にLéonを名乗ることになる。Léonはボリシェビキ体制に反対していたので1917年のロシア革命勃発後もリヨンにとどまったが、1922年にモスクワにマルクス＝エンゲルス研究所ができると、その所長を務めたリャザーノフに依頼されて、研究所の蔵書にするための古書をフランスで探す仕事を開始した。この仕事に付いていったことがきっかけで、ミシェル・ベルンシュタインもまた古書の収集に邁進することになった。

スターリン体制下になると、ベルンシュタイン父子はモスクワとの関係を断ち切られた。かわって、先ほど述べたアムステルダムの社会史国際研究所や、ミラノのフェルトリネッリ研究所などのエージェントとして、フランス各地で古書の収集にあたることになった。その縁で古書商を営むことになり、アメリカのいくつかの大学図書館の他、ゲーリッツをはじめとする社会科学系の稀覯書古書店に仕入れた本を売却した。ベルンシュタインの古書の収集の方法というのは、フランス国内のあちこちで社会運動の実践家の遺産相続人のもとをまわって、その蔵書を買い取るというものだった。ミシェル・ベルンシュタインがこういうやりかたで収集したフランス革命期のパンフレット・コレクションが、やがて1977年に、ゲーリッツの仲介で、専修大学に売却されたわけである。

さて、ゲーリッツによれば、彼がベルンシュタインと共同でおこなったもうひとつの大きな事業が、コルヴェア文庫の売却だった。早稲田大学が1991年に開催したコルヴェア文庫の展示会の際のパンフレットでは、この文庫はジュゼッペ・コルヴェアの死後、その蔵書を核にして遺族により拡充されたもので、それにはミシェル・ベルンシュタインも多々助言をおこなっていた、とあるが[24]、ゲーリッツはさらに複雑な経緯を示唆している。というのは、コルヴェア文庫は第二次世界大戦中に一度、ある歴史家（名前は不明）に売却された、というのである。この歴史家はサン＝シモン主義やフーリエ主義に関心をもっていて、資料を拡充した。それが再びコルヴェア一族のもとに戻ったか、あるいはその歴史家から直接買い取って、文庫がベルンシュタインの手に入った、とゲーリッツは推測している。

ベルンシュタインからコルヴェア文庫の売却先について相談を受けたゲーリッツが真っ先に考えたのが、日本だった。専修大学にベルンシュタイン文庫を売却する際に仲介をおこなった紀伊國屋書店に連絡したところ、まず紀伊國屋書店が買い取ることになった。その後文庫が早稲田大学に入るまでは10年あまりかかったようだ。早稲田大学は創立100周年と新中央図書

---

[23] 以下 Anton Gerits, *Books, Friends, and Bibliophilia. Reminiscences of an Antiquarian Bookseller*, Oak Knoll, 2004を参照。

[24]『フランス経済・社会・思想文庫（通称コルヴェア文庫）展示資料解題』早稲田大学図書館、1991年。

館の落成を記念し、この文庫を購入することにした。

さて、ここまでコルヴェア文庫成立の経緯についていくつかの指摘をおこなった。個々の本について誰が収集したか、何も確実なことが言えるわけではないが、その後どのように保存され、古書店を介して流通し、こうして大学図書館に収められたかを考えるとき、本文庫についてはコルヴェア男爵ひとりに帰すべきものでなく、代々の所有者やその移転にかかわったたくさんの人々がそれぞれの意図のもとでおこなった一種の「共同作業」の結果としてできあがった「構造体」であると言えるであろう[25]。もちろん大学図書館の蔵書というのはそれ自体ひとつの構造体をなしているわけだが、コルヴェア文庫はその中にあって、いわばひとつの小宇宙をなしている[26]。ひとりの人物の考えが投影された書棚ではなく、数多くの人々の思惑や希望が交錯して形成されたものである。

4．フーリエ主義関係蔵書の内容

最後の話題として、コルヴェア文庫に含まれるフーリエ主義に関する文献についてやや詳しく見ていきたい。というのは、これから見るように、フーリエ主義文献はこの文庫において特権化された対象だったといえるからである。

コルヴェア文庫購入の際、おそらくベルンシュタインの記述をもとにタイプ打ちしたカード目録をコピーして製本したものが、一緒に持ち込まれた[27]。早稲田大学図書館では、このカタログと現物資料とを照合し、実物の有無や記載内容の誤りなどの確認に用いた。

さて、ここにその1ページがあるが、よくみてみると、Inconnu à Del Bo などと記されているのがわかる。デル・ボというのは先ほど言及したフェルトリネッリ図書館の中心人物で、19

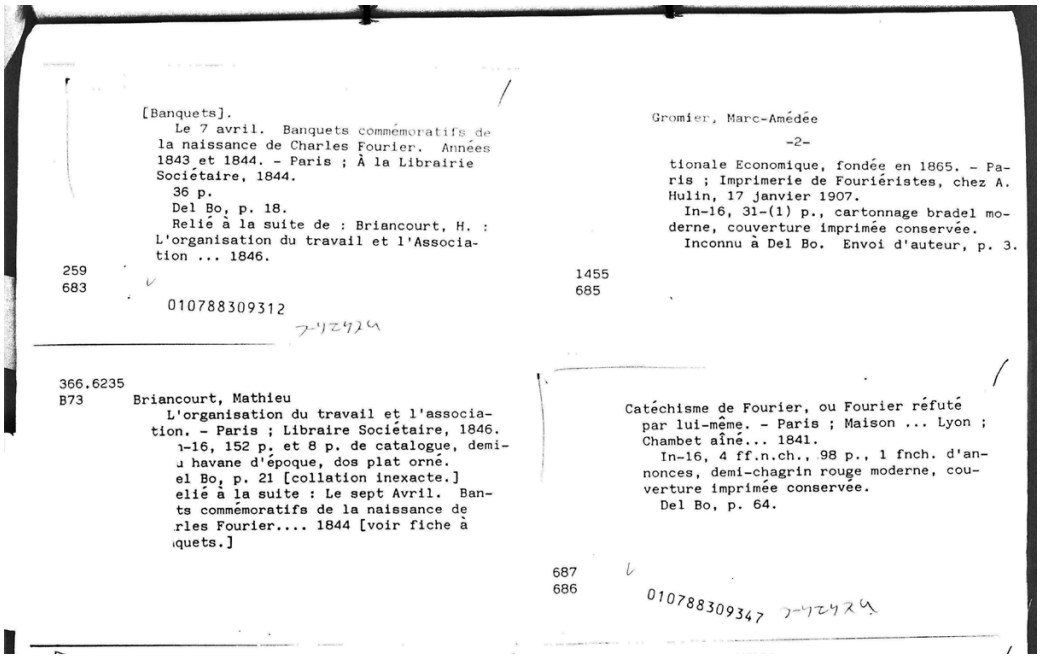
---

[25] 一橋大学社会科学古典資料センターのベルンシュタイン＝スヴァーリン文庫もまたゲーリッツが関与したコレクションであり、同様に、かなり拡充されている。この文庫では、レオン・ベルンシュタインの蔵書とフランス共産党創立メンバー（後に除名）のボリス・スヴァーリンの蔵書が合体されているだけではなく、さまざまな雑誌のリプリントが加えられている。その目的は、ロシア革命運動の歴史を書物を通じて語らせることであり、その意味で補遺は不可欠だった。

[26] なぜそれをコルヴェア文庫と呼ぶべきなのかということについて、ベルンシュタインがフランス革命史コレクションを専修大学に売却する際に送った原稿の中にある次のような文章を引用しておく。「1つの恐れが私につきまとって離れなくなりました。……この努力のすべて、この何年にもわたる作業のすべて、私の宝とするコレクションが……私の死後売却され世界中に四散してしまうのではないかという懸念にとりつかれていたのです。……このようにしてこのコレクションは東京……にやって来ました。……このことこそ、ひとりのコレクターが、その生涯の終わりに味わい得る最大の満足と私には思えるのです」（ミシェル・ベルンシュタイン「革命期文庫についての覚書」、『専修大学ミシェル・ベルンシュタイン文庫だより』、創刊号、1980年、16頁。同号にフランス語の原文も掲載されている。訳文はこの原文をもとに少しだけ変えた）。今日では大学図書館は予算不足や書庫の狭隘化によって寄贈を受け入れることさえ困難になっているが、このように蔵書をまるごと受入れてもらい、さらに名前を残してもらうことは、蔵書家にとってこのうえない夢だった。そして友人の名前を残すのは、友情のあかしでもあった。

[27] 時々日本語の説明がついているので、紀伊國屋書店の手が加わったかもしれない。なお、ベルンシュタイン自身の手書きの書誌の一部が、紀伊國屋書店が作った売り込み用冊子で紹介されている。

図２　コルヴェア文庫のカード目録。Del Bo の書誌への言及がみえる。


[Banquets].
Le 7 avril. Banquets commémoratifs de la naissance de Charles Fourier. Années 1843 et 1844. - Paris ; À la Librairie Sociétaire, 1844.
36 p.
Del Bo, p. 18.
Relié à la suite de : Briancourt, H. : L'organisation du travail et l'Association ... 1846.
259
683
010788309312

Gromier, Marc-Amédée
-2-
tionale Economique, fondée en 1865. - Paris ; Imprimerie de Fouriéristes, chez A. Hulin, 17 janvier 1907.
In-16, 31-(1) p., cartonnage bradel moderne, couverture imprimée conservée.
Inconnu à Del Bo. Envoi d'auteur, p. 3.
1455
685

366.6235
B73
Briancourt, Mathieu
L'organisation du travail et l'association. - Paris ; Libraire Sociétaire, 1846.
ı-16, 152 p. et 8 p. de catalogue, demi-ı havane d'époque, dos plat orné.
el Bo, p. 21 [collation inexacte.]
elié à la suite : Le sept Avril. Bants commémoratifs de la naissance de rles Fourier.... 1844 [voir fiche à ıquets.]

Catéchisme de Fourier, ou Fourier réfuté par lui-même. - Paris ; Maison ... Lyon ; Chambet aîné... 1841.
In-16, 4 ff.n.ch., 98 p., 1 fnch. d'annonces, demi-chagrin rouge moderne, couverture imprimée conservée.
Del Bo, p. 64.
687
686
010788309347

世紀の社会運動史に精通しており、1956 年にフェルトリネッリ図書館が所蔵するフーリエとフーリエ主義に関する資料についてまとめた書誌を出版していた。ベルンシュタインはこの書誌にコルヴェア文庫の資料が掲載されているかを照合し、あればそのページ数を記し、なければ「Del Bo になし」と記載したわけである。こういう配慮はひとつには古書商としての商業上の理由だし[28]、もうひとつは純粋に文献学的な理由、資料収集上の興味である。

コルヴェア文庫の売却を仲介したゲーリッツはこの点に注目した。当時の事情を、ゲーリッツ自身が書き残した文章によって再現してみたい。

「コルヴェア文庫というまたとないコレクションをそのままのかたちで保ち、それを社会経済史についての研究センター兼図書館に配置するという考えに、なによりも私は惹かれました。そしてそれ以来私は、本の整理をしながら、私自身書誌学的研究をおこなうという大胆な計画を夢みるようになりました。……幸いなことに、友人であるミシェル・ベルンシュタインが手助けしてくれ、彼がつくっていた書誌を私に見せてくれました。〔コルヴェア文庫の〕本が目録にとられるとすぐ私のオフィスに運ばれ、私は夜や週末をつかってその本を検分することができました。そんな仕方で、私は書誌学者になるという私の夢を一部分叶えることができたのです。私はまずシャルル・フーリエとその学派についての本とパンフレット類の豊富なコレク

[28] 専修大学に収められたフランス革命資料についても、ベルンシュタインはフランス国立図書館に蔵書として収められているかどうかを逐一チェックしている。

ションに関心を集中させ、その後、サン＝シモンとその弟子たちの著作を検討しました」[29]。

このようにしてゲーリッツは、フーリエ主義に関する書誌と、サン＝シモン主義に関する書誌を完成させ、出版することになった[30]。つまり、コルヴェア文庫は早稲田大学に入る前にすでに学術的成果をうみだしていたことになる。

つぎに、コルヴェア文庫に含まれるフーリエ主義の文献のいくつかを紹介したい。まずフーリエについて考えるときに重要なのは、フーリエ自身の思想と、フーリエ主義者たちの行動とを分けて考察することである。時期的に考えても、フーリエの思想は1800年代から1810年代にかけて骨格が形成され、1820年代に大きな転換を被りつつ発展した。大きな転換というのは、1820年代になって、社会実験的な小さな共同体を形成するというプログラムが本格的に提唱されるようになるからである[31]。一方、フーリエの弟子たちは1820年代から徐々にかたちをつくるようになり、1830年代以降大きく発展していった。フーリエは1837年に死去するが、フーリエ主義の最盛期は1840年代である、と言えば、違いがわかりやすいかもしれない。

コルヴェア文庫についていえば、そこに含まれるのはフーリエに関する資料群というよりも、フーリエ主義に関する資料群といったほうが適切である。すでに述べたように、フーリエ主義グループのリーダーだったコンシデランの著作も多数含まれている。社会運動として大きな歴史的意義をもったのはフーリエ主義だから、これは十分に理解できる収集方針といえる。収集したのがコルヴェア自身だったか、それともおそらくそれを受け継いだ歴史学者だったか、あるいはベルンシュタインだったかはあまり重要でない。

もちろん、フーリエ自身の著書もコルヴェア文庫に網羅されている。その中で興味深いものを指摘するとすれば、『産業の新世界』の宣伝のために記された『告知小冊子』という題名の冊子があげられる。

フーリエは著作を広めるため、政治家やジャーナリストなど著名人に著書を献呈した。献呈が効果をもったかはともかく、献呈するときに内容を要約した手紙をつけたり、本の内容を点検して手書きで修正を加えたりするのを常にしていた。『産業の新世界』出版の際に書かれたこうした手紙については、日本でも東北大学附属図書館や名古屋市立大学総合情報センターに保管されている。修正のほとんどは単なる誤植の修正だが、『告知小冊子』のコルヴェア文庫本では、題名の一部を修正しようとしている。

はっきり言えば、これはフーリエが本当に選ぼうとした題名がどちらだったか、といった問

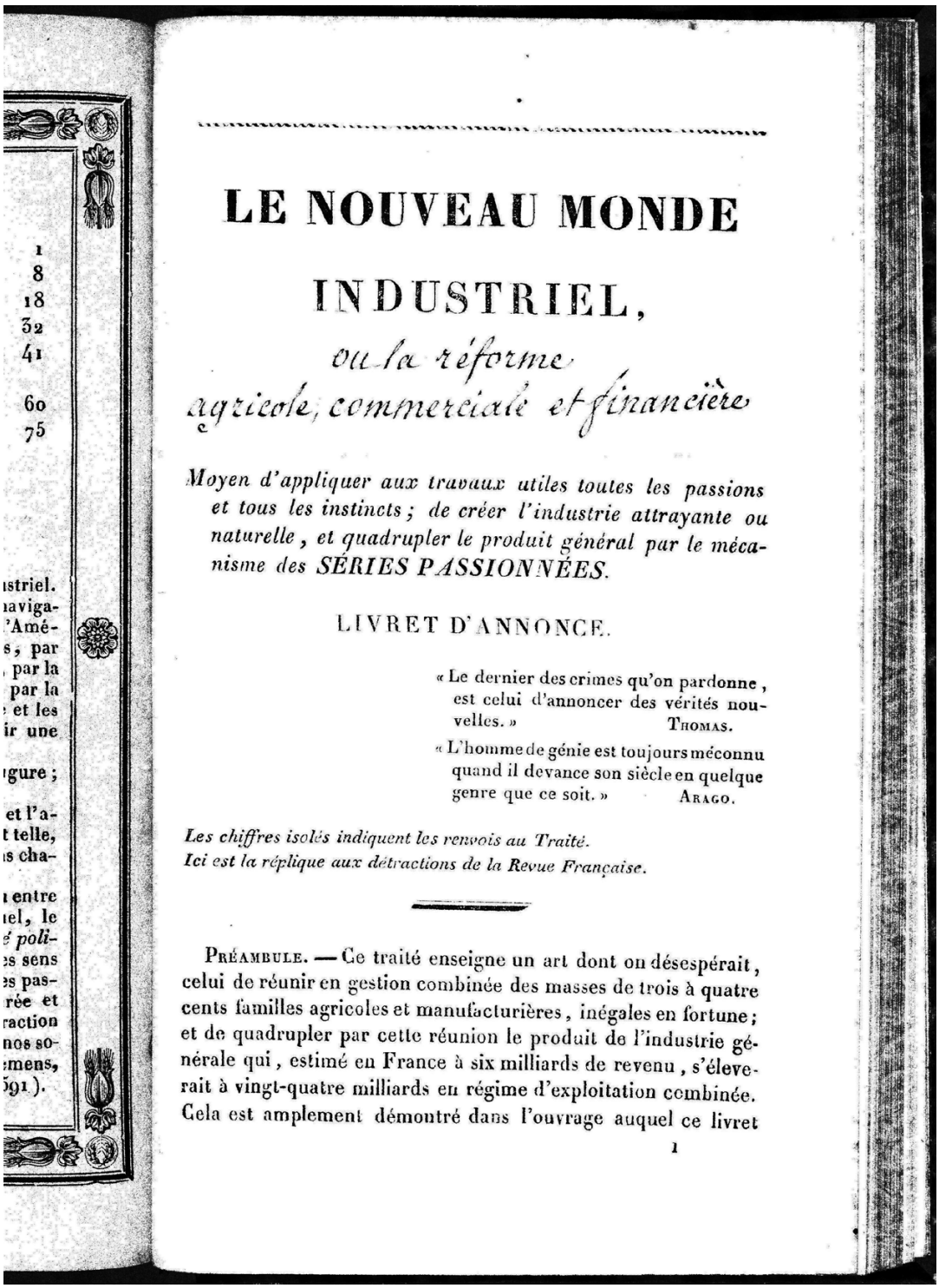
---

[29] Anton Gerits, « Du rêve à la réalité », *For Bob de Graaf, antiquarian bookseller, Publisher, Bibliographer. Festschrift on the occasion of his 65th birthday*, edited by Anton Gerits, 1992.

[30] それぞれ正確には、Del Bo が作成した書誌の補遺と、Walch が作ったサン＝シモン主義の書誌の補遺である。Anton Gerits, *Additions and Corrections to Gieuseppe del Bo's "Charles Fourier e la Scuola Societaria"*, Hilversum, 1983. Id. *Additions and Corrections to Jean Walch : "Bibliographie du Saint-Simonisme"*, Gerits, 1986.

[31] 正確にいうと、小さな共同体の形成が社会転換に繋がるという構想は当初からもっていたが、それを共同体実験というかたちに定式化したのが1820年代だった。

図３ 『産業の新世界』の販売促進のために記された『告知小冊子』。「L' AGRICULTURE COMBINÉE（組み合わされた農業）」という副題が、付箋によって、「la réforme agricole, commerciale et financière（農業･商業･財政改革）」と修正されている



LE NOUVEAU MONDE INDUSTRIEL,

ou la réforme agricole, commerciale et financière

Moyen d'appliquer aux travaux utiles toutes les passions et tous les instincts ; de créer l'industrie attrayante ou naturelle, et quadrupler le produit général par le mécanisme des SÉRIES PASSIONNÉES.

LIVRET D'ANNONCE.

« Le dernier des crimes qu'on pardonne, est celui d'annoncer des vérités nouvelles. » THOMAS.

« L'homme de génie est toujours méconnu quand il devance son siècle en quelque genre que ce soit. » ARAGO.

Les chiffres isolés indiquent les renvois au Traité.
Ici est la réplique aux détractions de la Revue Française.

PRÉAMBULE. — Ce traité enseigne un art dont on désespérait, celui de réunir en gestion combinée des masses de trois à quatre cents familles agricoles et manufacturières, inégales en fortune ; et de quadrupler par cette réunion le produit de l'industrie générale qui, estimé en France à six milliards de revenu, s'éleverait à vingt-quatre milliards en régime d'exploitation combinée. Cela est amplement démontré dans l'ouvrage auquel ce livret

1

いを提起するものではない。特定の誰かのための献呈用の本を目の前にしてなにか修正点がないかと鵜の目鷹の目で見たとき、題名がどうにも気になった、ということであって、真の題名が何か、ということではない。従って、これはフーリエの理論にかかわる問題ではない。しかし、題名をめぐって逡巡する、あえていえば右往左往するこうした態度は、確かに、フーリエの大きな特徴といえる。この態度を私はあるところで、「書きながら考え、考えながら書く」態度だと述べたことがある[32]。これは理論以前の一種の心的な態度と呼べるものだが、まだ理論になっていないという意味で重要でないのではなく、むしろ理論を下から支え、理論の前提になっているものとして重要なのである。

研究者にとって、テキストを読むだけではなく、実際の本を、しかも何種類も読むことが大切なのは、こうした、理論の前提になっているものへの感受性を育むことができるからである。

つぎに、フーリエ主義者たちがさまざまなイベントに際して発行した文書をコルヴェア文庫からいくつか見てみたい。実際、ヴィクトル・コンシデランの結婚式の案内状や、フーリエの死亡通知や葬儀に関する案内状、コンシデランの肖像写真など、さまざまな資料がコルヴェア文庫には含まれている[33]。社会史や運動史の観点からみれば、さまざまなイベントを通してフーリエ主義者たちが結束を強めていったことが、これらの資料を通して容易に理解できる。

もうひとつ紹介したいのは、同じく『産業の新世界』の出版の際に、宣伝用の冊子として作られたもので、著者はフーリエ自身ではなく、彼の信奉者であり後援者だったジュスト・ミュイロンである。

この資料を掲げた理由は、これが稀覯資料だからというだけではない。これが合本されているという理由である。このパンフレットの他に合本されているのは、ミュイロンの『新社会論』などだった。

誰が合本したかはわからない。ゲーリッツによれば、コルヴェア文庫のほとんどの図書はベルンシュタインが引き取った後にパリの職人に製本させたもののようだが[34]、それはコルヴェアの死後手入れする人のいないままになっていた本が傷んで、元の製本が使い物にならなくなっていたためらしい。しかし、合本というかたちにしたのがベルンシュタインかどうかは別問題である。それ以前から、このようにまとめられていたのかもしれない。大事なのは、このようなグルーピングが可能だったということである。『産業の新世界』というフーリエの著書の宣伝文が、フーリエの著作の脇にではなく、宣伝文の著者でありフーリエ主義の中心人物のひとりだったミュイロンの脇に置かれるのである。フーリエはけっして単独では読まれず、

---

[32] 福島知己「シャルル・フーリエ『四運動の理論』初版の異刷について」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』30 号、61-72 頁、2010 年。

[33] 案内状には宛名が記されていないから、おそらく実際に送付されたものではなく、印刷したまま余った残部を譲り受けたものと考えられる。

[34] 製本や装丁をもとに、ベルンシュタインが流通にかかわった古書をある程度推測できるかもしれない。

フーリエ主義に包摂されて読まれていた。合本という形式がこのような繋がりを可視化しているという点が重要ではないかと思う。異なる関係づけによって、別のオリエンテーションがうまれるのである。

文庫には、フーリエ主義者たちがアルジェリアでおこなった共同体実験に関する詳細な報告書なども含まれていて、一次史料として非常に貴重なものである。フーリエ主義の共同体実験で最も有名なのは、1832 年にパリ近郊のコンデ＝シュル＝ヴェグルでおこなった実験や 1840 年代のアメリカ合衆国における共同体建設を除けば、シトー会修道院を買い取っておこなわれたものと、アルジェリアのオランという都市の近くにあるシックという地域でおこなわれた実験である。アルジェリアのフーリエ主義共同体については Fernand Rude が研究論文を残しているが[35]、その一次史料となる議事録がコルヴェア文庫に含まれている[36]。

最後にまとめるならば、文庫に収められているひとつひとつの文献だけではなく、文献がどのように合本されているか、さらにその図書がどうして文庫にまとめられているか、といった問いが、書物の受容を考えるうえで大きな手掛かりとなりうるし、それを考察することを通じて新たな研究へと導かれる可能性がある。つまり、「文庫」そのものが一個の研究対象となりうるといえる。この点で早稲田大学は電子目録に巧妙な工夫をしている。Corvaia という言葉で検索すると、書誌が 6,196 件列挙される。このうちコルヴェア文庫の展示会の資料が一件あり、別の Corvaia という人物の本が 1 件あるが、残りは Corvaia 文庫に収録されている資料である。このように、なんらかの工夫によって、文庫単位のまとまりが可視化されることは大いに意味があると考えられる。

---

[35] Fernand Rude, « Les fouriéristes lyonnais et la colonisation de l'Algérie », *Cahiers d'histoire*, t. 1, 1956.

[36] フランスは 1830 年代からアルジェリアの植民地化を開始している。その最初の時期に、サン＝シモン主義が果たした役割については比較的よく知られている。アンファンタンの率いるサン＝シモン主義グループがアルジェリアの視察をおこない、その成果をもとにアルジェリア植民を建白することになるからである。フーリエ主義者はいくつかの点でサン＝シモン主義者の動きをなぞっているが、アルジェリアとの関係についてもその一例と言える。サン＝シモン主義とアルジェリアについては以下を参照。平野千香子『フランス植民地主義の歴史　奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院、2002 年、特に第 2 章「カリブ海からアルジェリアへ　イスマイル・ユルバンを通して」。フランス領アルジェリアについては、工藤晶人『地中海帝国の片影　フランス領アルジェリアの 19 世紀』東京大学出版会、2013 年、も参照。

コルヴェア文庫の 1649 年
―― コルヴェアによるマザリナード文書の収集 ――

L'année 1649 dans la collection Corvaia :
les Mazarinades collectionnées par la famille Corvaia

The year of 1649 in the Corvaia Collection :
the Mazarinades collected by the Corvaia family

雪嶋　宏一
Koichi YUKISHIMA

1．コルヴェア文庫の出版年代の構成

現在の早稲田大学中央図書館は 1982 年の早稲田大学創立 100 周年の記念事業の一環として建設され、1991 年に開館した。新図書館開館を記念して紀伊國屋書店から 1988 年に購入された大型の洋書貴重書のコレクションが「コルヴェア文庫」（the Corvaia Collection）である。紀伊國屋書店はこのコレクションをオランダの古書肆アントン・ゲーリツ（オランダ語ではヘーリツ）（A. Gerits & Son）から仕入れていた。早稲田大学図書館ではこのコレクションを「フランス経済・社会・思想文庫」と命名して、文庫 22 という文庫番号を付与した。

コルヴェア文庫は、シチリア出身のスイスの銀行家であったコルヴェア家が収集した 15 世紀から 20 世紀前半に至るフランスの政治、経済、社会に関する印刷本約 1 万点からなる貴重書の大コレクションである。しかし、文庫の整理作業は長らく滞り、収集から 20 年以上が過ぎた 2010 年代にようやく整理が進められ、早稲田大学図書館の OPAC で検索できるようになった。今回のシンポジウムでコルヴェア文庫がテーマとして取り上げられるようになったのも文庫の整理作業の進展があったからでもある [1]。

今回のシンポジウムに際して、コルヴェア文庫を OPAC で検索して出版年別に統計を取ってみた。2022 年 7 月 5 日時点の結果を表 1 ～ 3 に示す。表 1 に示すように 17 世紀からタイトル数が増え、18 世紀末のフランス革命期と 19 世紀前半の 7 月革命から 2 月革命期のタイトルが顕著であることが判明する。これはコルヴェアがフランスの政治的混乱期の書物の収集に熱心であったことの反映であり、その点については早稲田大学がこの文庫を収蔵する以前から知られていた。しかし、この統計で筆者が特に興味を引いたのは 17 世紀中葉の数値であった。17 世紀の出版物の出版年を 5 年毎に区分して集計した結果（表 2）、1646-1655 年の間の出版物の数値が非常に高いことが判明した。そのため、さらにこの期間を 1 年毎に集計すると、1649 年の出版物が 160 点もあり、特に顕著であった。1649 年はフランスではまさにフロンド

の乱の渦中にあった年であり、パリを中心に膨大なパンフレットが刊行されていたことが知られている。この統計結果から、コルヴェアはフランス革命や19世紀の革命ばかりでなく、17世紀の革命的な事件であるフロンドの乱にも相当な関心を持っていたことが判明した。筆者は、コルヴェア文庫の中でもこれまでほとんど知られることがなかったフロンドの乱に関する資料について調査する必要を感じた[2]。

表１　コルヴェア文庫（文庫22）年代別整理済みタイトル数

出版年代	タイトル数
1500年以前	1
1501-1550	28
1551-1600	98
1601-1625	76
1626-1650	240
1651-1675	156
1676-1700	109
1701-1725	184
1725-1750	213
1751-1775	979
1776-1800	1502
1801-1825	470
1826-1850	1033
1851-1875	601
1876-1900	386
1901-1925	573
1926-1950	361
合計	**7010**

表２　17世紀の出版年代別統計

年代	タイトル数	年代	タイトル数
1601-1605	8	1651-1655	73
1606-1610	21	1656-1660	12
1611-1615	25	1661-1665	22
1616-1620	9	1666-1670	35
1621-1625	14	1671-1675	14
1626-1630	10	1676-1680	15
1631-1635	8	1681-1685	20
1636-1640	11	1686-1690	26
1641-1645	23	1691-1695	25
1646-1650	189	1696-1700	26

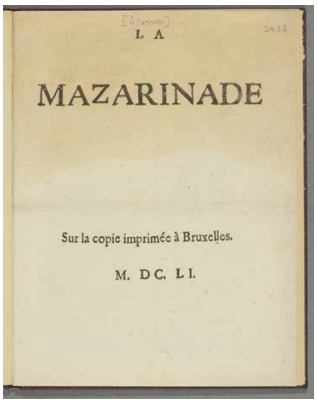
表３　1646-1653年の出版物統計

出版年	タイトル数
1646	2
1647	1
1648	10
1649	160
1650	16
1651	18
1652	47
1653	2
1654	3
1655	2

2．フロンドの乱とマザリナード文書

フロンドの乱（La Fronde）は 1648 年に勃発して 1653 年まで続いたフランスの国中に広まった大争乱である。反乱の発端は、ルイ 14 世の摂政政府を牛耳っていたイタリア出身のマザラン（Mazarin, Jules, 1602-1661）枢機卿が、1649 年 1 月に、30 年戦争の戦費調達のために打ち出した 24 の官職ポストの売り出しであった。この政策に反対したのがパリ高等法院（Parlement de Paris）等の 4 つの高等法院であり、同年 5 月に団結して対抗策を打ち出した。8 月にマザラン側が高等法院の一員を逮捕したことでフロンドの乱が勃発した。そのため、フロンドの乱の前半は「高等法院のフロンド」と呼ばれ、主に課税強化に反対する高等法院と民衆の反乱であった。「フロンド」とは、『旧約聖書』「サムエル記」に登場する羊飼いダビデが巨人ゴリアテを倒すために使った投石具のことであり、政府に対して高等法院が石を投げているような比喩から生まれた名称であるという。そして、フロンドの乱の後半は「大貴族のフロンド」と呼ばれ、1650 年 1 月のルイ 2 世コンデ大公（Louis II de Bourbon, prince de Condé, Duc d'Enghien, le Grand Condé, 1621-1686）の逮捕をきっかけとする各地の蜂起であった。紆余曲折を経て 1653 年 2 月にマザランが復帰して、7 月にボルドーの反乱が鎮圧されて終息した。

このようなフロンドの乱の最中に、パリおよび各地で王党（マザラン）派とその反対派によって膨大な文書が作成され印刷出版された。これらの同時代の文書を「マザリナード文書」（Les mazarinades）と総称している。「マザリナード」は、1651 年にスカロン（Scarron, Paul, 1610-1660）が発表した *La Mazarinade*（文庫 22-423）（図 1）をその起源とする。全体は 5,200 種余りの印刷物（大半が小冊子）と 300 種ほどの手書き文書からなり、マザラン（Jules Mazarin, 1602-61）関係文書、マザラン批判文書、国王宣言、高等法院採決、戦況報告、檄文、建白書、張り紙、政治批判戯れ歌、大貴族の書簡など実に多種多様である。


L A

MAZARINADE

Sur la copie imprimée à Bruxelles.

M. DC. LI.

図 1

マザリナード文書の収集は、マザラン図書館の司書を務めたノーデ（Naudé, Gabriel, 1600-53) に始まる。彼は「マスキュラ」（Mascurat）と通称される『1649 年 1 月 6 日から 4 月 1 日の宣言までに枢機卿マザランに対して印刷されたすべての見解』（*Jugement de tout ce qui a esté*

imprimé contre le cardinal Mazarin, depuis le sixiéme janvier, jusques à la declaration du premier avril mil six cens quarante neuf）という資料集を1649年に編纂したことに起源する。「マスキュラ」は翌年すぐに大幅な改訂増補が行われた。

以来、フランスおよび欧米の図書館ではマザリナード文書の収集が始まり、マザランが設立し、ノーデが司書として資料収集にあたったパリのマザラン図書館（La Bibliothèque Mazarine）では約25,000点のコレクションが集積され、マザリナード文書研究の中心となっている[3]。また、フランス国立図書館の一つであるパリのアルスナル図書館（La Bibliothèque de l'Arsenal）には22,500点のコレクションが構築され[4]、フランス国立図書館のOPACで検索可能となっている。その他の国でもコレクションが知られ、デンマーク王立図書館では32冊に合本製本された資料群があり[5]、またロシアのサンクト・ペテルブルクのコレクションも知られている。アメリカでも各地にコレクションがあり[6]、ハーヴァード大学ホートン図書館（Houghton Library, Harvard University）では3,902点が所蔵されている[7]。日本では、東京大学附属図書館に全44冊に合本製本された文書2,800点が所蔵され[8]、一橋大学社会科学古典資料センターではメンガー文庫に124点、フランクリン文庫に57点が含まれている[9]。

マザリナード文書の総合的な研究は19世紀フランスの編集者で文筆家であったモロー（Moreau, Pierre René Célestin, 1805-1882）が編纂した『マザリナード書誌』（*Bibliographie des Mazarinades,* Paris: Renouard, 1850-51. 3 vols.、第3巻末尾に補遺あり）を嚆矢とする。彼はその後も2度にわたって補遺版を『愛書家・司書紀要』（*Bulletin de bibliographile et du bibliothécaire*）に発表した[10]。彼に続いてソカール（Socard, M. Émile）やラバディ（Labadie, Ernest）らが補遺版を刊行した[11]。その後20世紀後半からユベール・キャリエ（Carrier, Hubert）がマザリナード文書の徹底的な調査を行って、『フロンドの乱（1648-1653）の印刷出版：マザリナード文書』（*La presse de la Fronde (1648-1653): les mazarinades*）を発表して、マザリナード文書の総合的な研究を行った。彼は世界中に所蔵されるマザリナード文書を訪ねて、世界総合目録を試みたが、結局公刊されなかった。彼が残した資料はマザラン図書館に寄贈された。

このような研究に基づいて、東京大学附属図書館に所蔵されるマザリナード文書の研究が一丸禎子によってマザラン図書館との連携で進められている[12]。

3．マザリナード文書の印刷

早稲田大学図書館所蔵のマザリナード文書の大半は四折判であり、そのほとんどが一折2葉からなるいわゆるハーフシートで印刷されている。四折のハーフシートは15世紀に活版印刷が始まってまもなく登場した最初の四折判の印刷方法であり、組版に時間がかからず、簡便に素早く小冊子を印刷することができる。四折判は基本的には1折4葉（A^4）で、ページ数は8ページとなるが、全紙を半切したハーフシートでは1折2葉（A^2）で4ページとなる（図2-3）。

17世紀初めにオランダで雑誌（corantos）が登場した時、ハーフシートの四折判が採用された。

すぐにフランスでも定期刊行物 Gazette（1631-）が登場して、同様なハーフシートの四折判で印刷されたことから、パリの印刷業者はこの判型をすでに知っていたのである。

マザリナード文書に使用された活字はほぼローマン体とイタリック体であり、大半の資料ではタイトルの活字と本文の活字の二種類のサイズが使用された。中には欄外余白にさらに小さいサイズの活字で Marginalia（欄外余白の注記）が印刷されたものもある。

マザリナード文書は 17 世紀中葉の資料であり、中でも印刷物については、小冊子ながらほぼすべての文書にページ付けが行われている。そのことから、当時すでにページ付けはパリの印刷業者の間では標準的な印刷技術になっていたことが確認できる。しかしながら、早稲田大学図書館のマザリナード文書の中には手書きで葉番号が書き込まれているものがあることから、合本製本した際に、通し番号を葉番号で振っていたことになる。したがって、ページ付けが一般的であったが、葉番号もまだ使われていたことが判明する。

図２　四折判ハーフシートの印刷１（折丁 A-B2　８ページ）

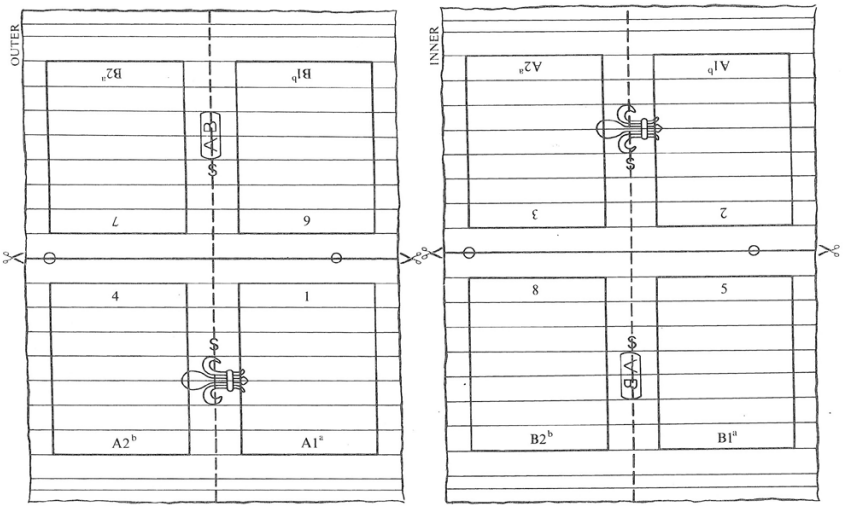
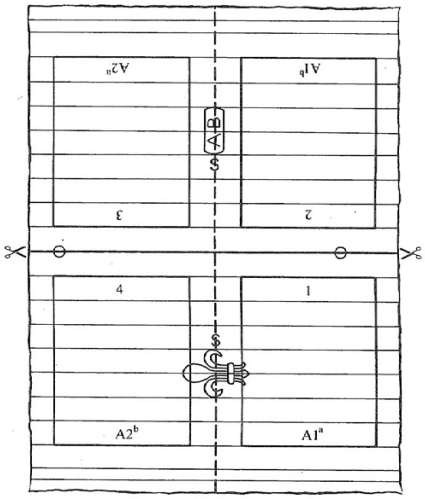


図３　四折判ハーフシートの印刷２
（折丁 A2 4 ページ）



図版典拠
図２：Gaskell, P., *A new introduction to bibliography*, Oxford : Clarendon Press, 1985, p. 90.
図３：Gaskell, P., *op. cit*., p. 91.

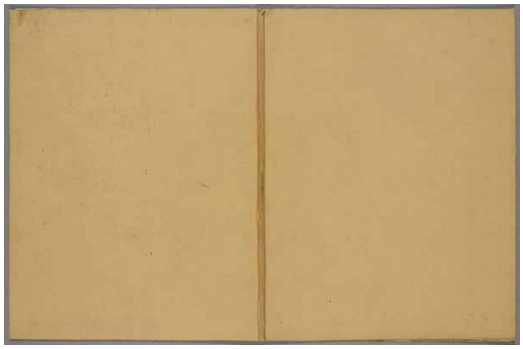
4．コルヴェア文庫中のマザリナード文書の製本

コルヴェア文庫中のマザリナード文書は製本状態に特徴があり、以下の７種類に装丁を区別することができる。

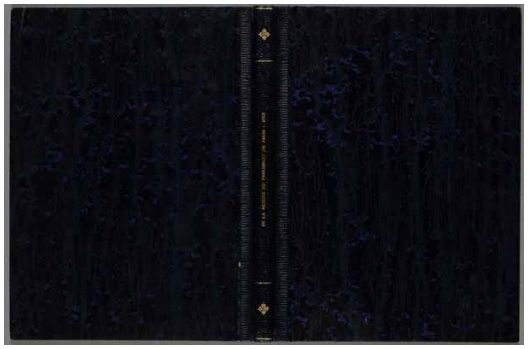
Ⅰ　原装（未製本）文庫 22-430-2, B792

Ⅱ　18 世紀茶色仔牛革装　文庫 22-305, A538

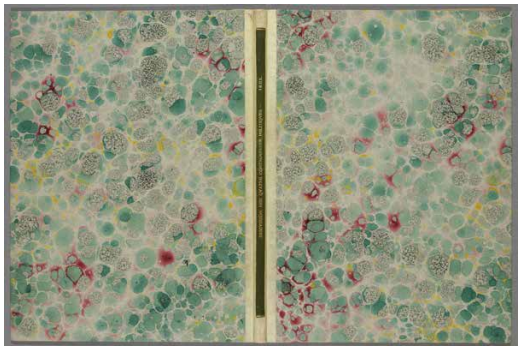
Ⅲ　簡素なボード装（背に標題なし）文庫 22-A594, A596



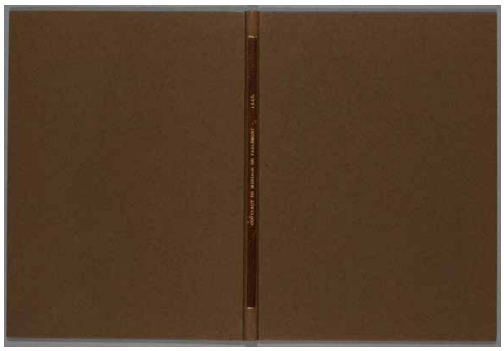
Ⅳ　20 世紀の黒色・赤色モロッコ背革装（背に標題あり）



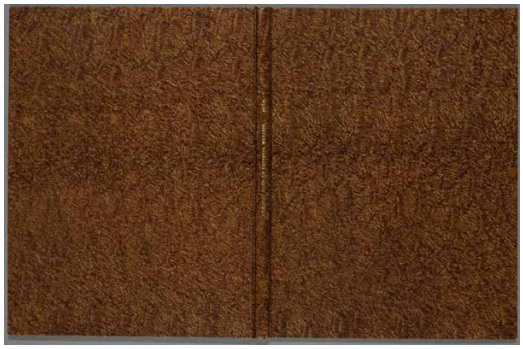
Ⅴ　20 世紀のヴェラム背革装、大半では緑色の革に標題を刻印して貼付



Ⅵ　20 世紀の茶色ボード紙装、茶色の革背に標題を刻印して貼付



Ⅶ　20 世紀の金茶色ボード紙装、標題を直接刻印



Ⅲのボード装については、確かなことは言えないが、19 世紀あるいは 20 世紀初めの古めかしいボード紙が使用されており、Ⅳ～Ⅶの装丁より古いものであると判断できる。Ⅳは黒色あるいは赤色のモロッコ革を背革に使用して、背にタイトルおよび fleurons（装飾活字）を刻印している。それらの多くは平にはマーブル紙様の装飾紙を貼付したボード紙を採用している。Ⅴはヴェラムの背革装で、背にタイトルを刻印し、平はマーブル紙等の文様のある紙を貼付したボード紙を採用している。Ⅵは茶色のボード紙が使用され、背にはタイトルを刻印したこげ茶色の革が貼付されている。Ⅶは金茶色のボード紙を使用して、標題を背に直接刻印している。なお、Ⅶには背文字が刻印されていないものが数点含まれている。

表 4　コルヴェア文庫中のマザリナード文書の装丁区分

装丁区分	冊数
Ⅰ	2
Ⅱ	2
Ⅲ	2
Ⅳ	28
Ⅴ	45
Ⅵ	23
Ⅶ	47
合計	**149**

装丁のこのような違いは、収集した古書肆の扱いによるものなのか、あるいは収集した時期の違いなのか不明であるが、ⅣとⅤは複数の文書が合本製本されているが、ⅥとⅦの大半はほぼ 1 点ずつの製本になっている。これらの資料は 17 世紀以来どのような由来をもってコルヴェア家に収集されたのか分からないが、上述の手書きの葉番号を観察すると、多くの資料は元々合本製本されていたが、おそらく古書肆の許で

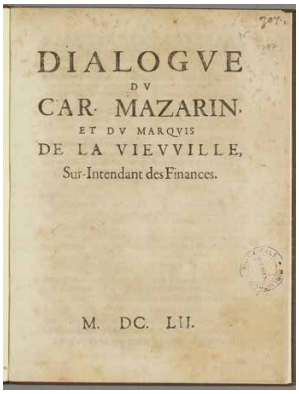
ばらばらにされて、1点ごとに再製本されていったと推測できる。このような製本仕様がコルヴェア家の趣味であったのか、あるいは古書肆の事情であったのかは不明である。大半のマザリナード文書は小冊子であったことから、収集する側は合本製本したほうが管理しやすく、閲覧も容易であったが、書肆の側は1点1点ばらばらのほうが販売しやすかったと思われる。

5．コルヴェア文庫中のマザリナード文書の来歴

コルヴェア文庫中のマザリナード文書の来歴は上述のように大半は不明であるが、以下の3点については蔵書票や蔵書印で来歴を知ることができる。

1　文庫 22-261　Bibliothèque municipale Nîmes（蔵書印）装丁Ⅵ

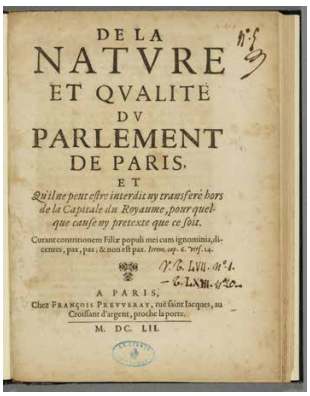
Mazarin, Jules, *Dialogue du car. Mazarin, et du marquis de la Vieuville, sur-intendant des finances*, [Paris], 1652. Moreau 1087


DIALOGVE
DV
CAR. MAZARIN.
ET DV MARQVIS
DE LA VIEVVILLE,
Sur-Intendant des Finances.

M. DC. LII.

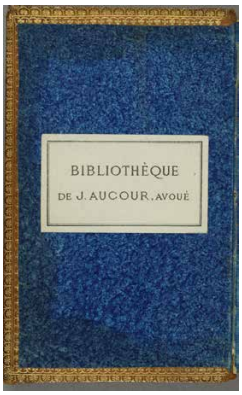
2　文庫 22-286　Ex libris de Cayrol（蔵書印）装丁Ⅳ

De la nature et qualité du Parlement de Paris : et qu'il ne peut estre interdit ny transferé hors de la capitale du royaume, pour quelque cause ny pretexte que ce soit, A Paris : Chez François Preuveray, 1652. Moreau 857


DE LA
NATVRE
ET QVALITÉ
DV
PARLEMENT
DE PARIS,
ET
Qu'il ne peut estre interdit ny transferé hors de la Capitale du Royaume, pour quelque cause ny pretexte que ce soit.
Curant contritionem Filiæ populi mei cum ignominia, dicentes, pax, pax; & non est pax. Jerem. cap. 6. vers. 14.
A PARIS,
Chez FRANÇOIS PREVVERAY, rue saint Iacques, au Croissant d'argent, proche la porte.
M. DC. LII.

３　文庫 22-A538　Bibliothèque de J. Aucour, Avoué（蔵書票）装丁Ⅱ

Joly, Claude, *Recueil de maximes véritables et importantes pour l'institution du Roy. Contre la fausse et pernicieuse politique du Cardinal Mazarin, prétendu Sur-Intendant de l'éducation de Sa Majesté*, A Paris, 1652. Moreau 3039



１はフランス南部のニーム市の公共図書館の蔵書であったもので、なんらかの事情で市場に流出したものであろう。現在のニーム公共図書館（Bibliothèque Carré d'art）には多くの古版本が所蔵されているが、文庫 22-261 の Dialogue du car. Mazarin, et du marquis de la Vieuville, sur-intendant des finances（1652）の所蔵は確認できない。

２は、19 世紀のフランスの政治家であり蔵書家であったケロー（Cayrol, Louis-Nicolas-Jean-Joachim de, 1775-1859）の蔵書印である。彼の蔵書は 1861 年に競売されたため[13]、コルヴェア家がその一部を入手していても不思議ではない。競売目録を通覧すると、「マスキュラ」（lot 2211）などのマザリナード文書のいくつかが見られる。また、マザリナード文書を研究したモローの『マザリナード書誌』（lot 2209）と *Choix de Mazarinades*（lot 2210）が見られことから、ケローがマザリナード文書の認識をもって収集していた可能性がある。しかし、文庫 22-286 の *De la nature et qualité du Parlement de Paris* は競売目録には見当たらないようである。なお、フランス国立アルスナル図書館（Bibliothèque de l'Arsenal）にケローの旧蔵書の一部が収蔵されている[14]。

３は、弁護士オクール（J. Aucour）の旧蔵書である。オクールについて現時点は不明である。

その他、来歴は不明であるが、以下のような状態の資料が見られ、来歴に関係するかもしれないものがある。

1. 手書きの葉番号が書き込まれており、番号順に並べれば元の状態がある程度復元可能な資料
2. 別々に合本されていた資料をばらして、同じ著者（Du Bosc de Montandré, Claude, -1690）の著作をタイトル順に再製本したもの（文庫 22-130-1)
3. いくつかの雑誌は合本のまま（*Le Courier françois* 文庫 22-235）

6．コルヴェア文庫におけるマザリナード文書の特徴

コルヴェア文庫のマザリナード文書にはいくつかの顕著な特徴がある。第一に、ほとんどの文書のタイトルページ右上あたりに Moreau 書誌の番号が鉛筆で記されていることである。このような目録番号を記入することは欧米の古書肆がしばしば行う方法であることを考慮すると、本コレクションを販売した古書肆ゲーリツ、あるいはそれ以前にコレクションを在庫していた古書肆が行った可能性がある。これらの番号の多くは正確であるが、誤謬もいくつか見られる。また、番号は記入されていないが、Moreau を検索すると書誌を同定できるものもある。おそらく、コルヴェア家に書物を納入していた業者が Moreau の書誌を見ながらマザリナード文書を収集していたと思われる。このように、Moreau の書誌番号が記入されていることで、欧米の図書館の OPAC の検索が容易となっている。

第二の特徴は、ほとんどの文書がパリで出版されたもので、フロンドの乱後半にボルドーで出版された文書が無いことである。一方、この時期にパリで刊行された以下の 19 種の定期刊行物が含まれている。スガール（Sgard, Jean）が、フランスで 17-18 世紀に出版された雑誌の書誌を編纂しており [15]、そこに収録されているものについては書誌番号を付記する。

1. *Babillard tu temps en vers burlesque*, 1-6, 1649. 文庫 22-256 : Sgard 139 ; Moreau 556.
2. *Burlesque On de ce temps : qui scait tout, qui fait tout, et qui dit tout*, 1-3, nouvelle, 1649. 文庫 22-257 : Sgard 187 ; Moreau 611.
3. *Courier extraordinaire*, 1649. 文庫 22-235 : Sgard 295 ; Moreau 828.
4. *Courier extravagant*, 1649. 文庫 22-235 : Sgard 299 ; Moreau 829.
5. *Courier françois*, 1-12, par Rollin de la Haye, Janvier 1649. 文庫 22-235 : Sgard 300 ; Moreau 830.
6. *Courier de la Cour*, 1649. 文庫 22-235 : Sgard 269 ; Moreau 821.
   Courier de la Cour, 1652. 文庫 22-278 : Sgard 271 ; Moreau 820.
7. *Courrier du temps*, 1649. 文庫 22-235 : Sgard 292 ; Moreau 825.
8. *Courier plaisant*, 1649. 文庫 22-235 : Sgard 314 ; Moreau 832.
9. *Courier polonois*, 1-2, 1649. 文庫 22-235 : Sgard 318 ; Moreau 833.
10. *Factum, ou Defenses de Defenses de messire Philippes de la Mothe-Houdancourt duc de Cardonne*, 1, 3-5, 1649. 文庫 22-254 : not in Sgard ; Moreau 2849.
11. *Gazette burlesque, envoyée au gazetier de Paris*, 1649. 文庫 22-204 : not in Sgard ; Moreau 1468.
12. *Gazette de la place Maubert*, 1-2, 1649. 文庫 22-204 : Sgard 548 ; Moreau 1469.
13. *Gazettier des-interressé*, 1-2, 1649. 文庫 22-184 : Sgard 485 ; Moreau 1466.
14. *Gazette des halles touchant les affaires du temps*, 1-2 nouvelle, 1649. 文庫 22-204 : Sgard 548 ; Moreau 1470.
15. *Gazette de la place Maubert*, 1-2, 1649. 文庫 22-204 : Sgard 548 ; Moreau 1469.
16. *Journal contenant tout ce qui s'est fait et passé en la cour de Parlement de Paris*, le 13 may 1648 -

le 12 avril 1649, 1648-49. 文庫 22-173 : Sgard 628 ; Moreau 1741.

17. *Journal poetique de la guerre parisienne*, 1-12, conclusion, 1649. 文庫 22-148 : Sgard 775 ; Moreau 1763.
18. *Le mercure anglois*, 2, 1649. 文庫 22-278 : Sgard 912 ; Moreau 2451.
19. *Le mercure parisien*, 1649. 文庫 22-296 : Sgard 946 ; Moreau 2455.

第三の特徴は、口絵に銅板肖像画および紋章を掲載した文書が 5 点（文庫 22-134 ①（2 枚）, 205 ⑦ , 205 ⑲ , 287, A538（紋章））あることである。口絵の記述は Moreau の書誌にはなく、また、マザラン図書館のマザリナード文書目録にも該当する口絵に関する記述がないものである。

図 4　文庫 22-134 ①巻頭の銅版口絵（Moreau 3174 参照）

図 5　文庫 22-205 ⑦の巻頭の銅版口絵（Moreau 1395 参照）

図 6　文庫 22-205 ⑲の巻頭の銅版口絵（Moreau 3493 参照）

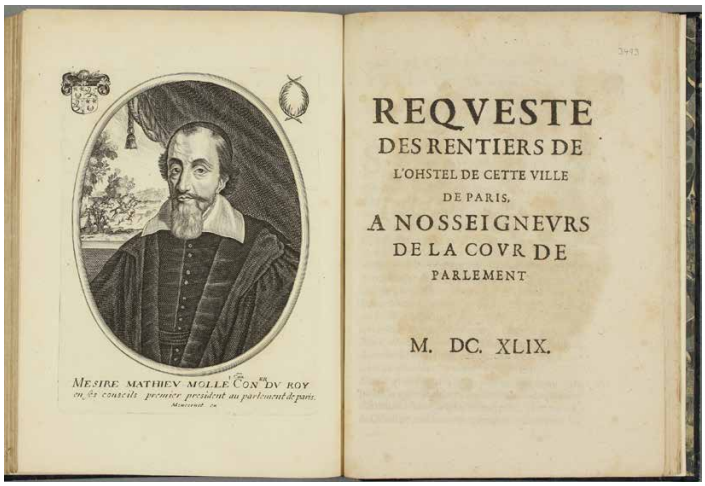
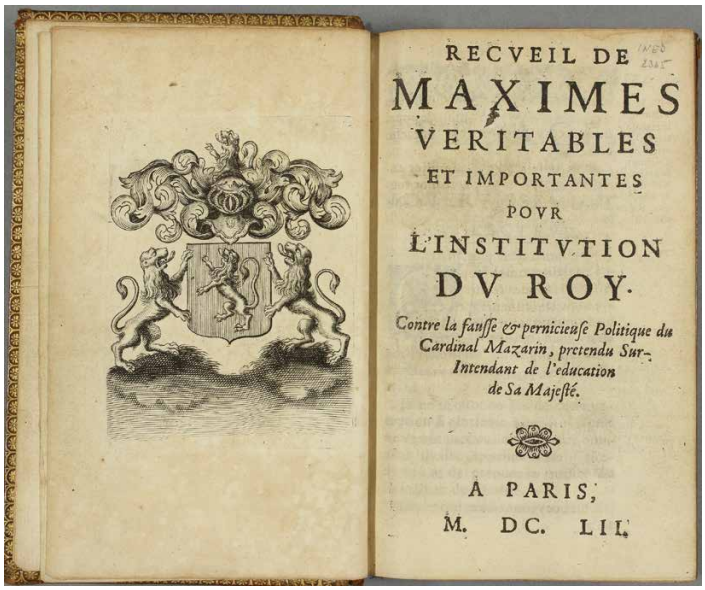


図 7　文庫 22-A538 巻頭の銅版口絵（Moreau 3039 参照）



その他、キャリエが 2 巻本で復刻したマザリナード文書の重要文献 52 点[16] のうち 13 点がコルヴェア文庫中にまれている。Vol. 1 は、政治的反対文書、民主主義的意見の表明の代表的文書（1-30）であり、そのうちの 10 文書、Vol. 2 は、経済、財政、フランス社会の発展とその緊迫に関する代表的文書（31-52）であり、そのうちの 3 文書である。

Vol. 1

1: *Contract de mariage du Parlement avec la ville de Paris*. A Paris, chez la veufue I. Guillemot, 1649.

Moreau 783　文庫 22-267

2: Clenleu, Bertrand d'Ostove de, *Lettre d'auis a messieurs du Parlement de Paris, escrite par vn prouincial.* Paris, [s. n.], 1649. Moreau 1837　文庫 22-201

3: *Epilogue, ou Dernier appareil du bon citoyen, sur les miseres publiques*. A Paris, chez Robert Sara, 1649. Moreau 1264　文庫 22-233 ②

4: *Que la voix du peuple est la voix de Dieu. Contre le sentiment de celuy qui nous a proposé une question toute contraire*. A Paris, chez Pierre Variquet,1649. Moreau 2943　文庫 22-145

5: Machon, Louis. *Les veritables maximes du gouvernement de la France, justifiées par l'ordre des temps, depuis l'establissement de la monarchie jusques à present : servant de response au pretendu arrest de cassation du Conseil du 18. janvier 1652. Dedié a son Altesse royale*. A Paris, l'imprimerie de la veufve J. Guillemot,1652. Moreau 3969　文庫 22-114 ①

10: *La discussion des quatre controverses politiques. I. Si la puissance des roys est de droict divin, & si elle est absoluë. II. Si les roys sont par dessus les loix. III. Si les peuples ou Estats generaux ont pouvoir de regler leur puissance. IV. Si dans l'estat ou se trouvent maintenant les affaires, on peut faire un regent ou lieutenant pour le Roy*. [s. l. : s. n., 1652] Moreau 1154　文庫 22-291

11: Arnauld d'Andilly, Robert. *La verité toute nue ou Advis sincere et des-interessé sur les veritables causes des maux de l'Estat, & les moyens d'y apporter le remede*. A Paris. 1652. Moreau 4007　文庫 22-147

20: Du Bosc de Montandré, *Le point de l'ovalle. Faisant voir que pour remedier promptement aux maladies de l'Estat, pendant qu'elles ont encor quelque resource. I. Il faut renforcer un party pour le faire triompher de haute-lute, parce que l'égalité feroit tirer la guerre en des longueurs insuportables. II. ...* [s. l. : s. n., 1652] (B) Moreau 2808　文庫 22-130-1 ⑮

21: Du Bosc de Montandré, Claude, *La franche marguerite. Faisant voir. I. Que le Roy ne peut point restablir le Mazarin : & que par consequent, l'armement qui se fait pour ce dessein, est injuste. II. ...* [s. l. : s. n., 1652] Moreau 1447　文庫 22-130-2 ⑤

26: *La mercuriale faisant voir : I. L'injustice des deux partis, soit en leurs fins soit aux moyens dont ils se servent pour y parvenir. II. La necessité d'un tiers parti pour reduire les autres deux à la raison*. A Paris, 1652. Moreau 2457　文庫 22-125

Vol. 2

31: Pierre de Saint-Joseph, *Catechisme des partisans, ou resolutions theologiques touchant l'imposition, levées & employ des finances. Dressé par demandes & responses pour plus grande facilité. Par le R.P.D.P.D.S. I.* A Paris, chez Cardin Besongne,1649. Moreau 652　文庫 22-135 ①

35: *La gueuserie de la Cour*. [s. l. : s. n.], 1649. Moreau 1533　文庫 22-205 ⑨

36: Michel de Grosbois, *Lettre du père Michel religieux hermite de l'ordre des Camaldoli, prés Grosbois, à monseigneur le duc d'Angoulesme, sur les cruautéz des Mazarinistes en Brie.* A Paris,

[s. n.], 1649. Moreau 2128　文庫 22-187

一方、Moreau 及びその補遺に収録されていない以下の文書がある。

文庫 22-195: *Les larmes & soupirs de la reine d'Angleterre, sur la mort barbare & cruelle du roy son mary : presenté á là reine regente, en forme de remontrance a l'estat present.* A Paris : Chez Robert Feugé, 1649. [4] p., 4to

この文書については、世界の主要な図書館の OPAC で検索しているが、現時点ではいずれの図書館でも所蔵が確認できない。したがって、マザリナード文書の範疇に加えてもよいかどうかも不確かであるが、版元の Robert Feugé はマザリナード文書の出版者として知られている人物であり[17]、また英国王チャールズ 1 世（Charles I of England, Scotland, and Ireland）が清教徒革命のよる処刑を悲しみ、亡命して祖国に戻っていた王妃アンリエット・マリー（Henriette Marie）に対して哀悼を捧げる文書は他にもあり、それがマザリナード文書となっているため、本書もマザリナード文書とみなすことができよう。

また、一橋大学社会科学古典資料センター所蔵マザリナード文書の中には[18]、コルヴェア文庫のマザリナード文書と版が一致する以下の 15 点がある。

1. H016, H018 = 文庫 22-135 ①
2. H017, H019 = 文庫 22-135 ②
3. H036 = 文庫 22-233
4. H037 = 文庫 22-205 ⑥ , 2701
5. H066 = 文庫 22-197
6. H079 = 文庫 22-119 ①
7. H080 = 文庫 22-119 ②
8. H091 = 文庫 22-142 ①
9. H092 = 文庫 22-142 ②
10. H096 = 文庫 22-424
11. H097 = 文庫 22-433
12. H111 = 文庫 22-287
13. H114 = 文庫 22-292 ①
14. H118 = 文庫 22-260
15. H119 = 文庫 22-147

7．おわりに

現在、コルヴェア文庫の整理はまだ完了していない。今回の調査でコルヴェア文庫中にマザリナード文書が 262 点含まれていたことが判明した、この数量は、日本では東京大学のコレクションに次いで 2 番目となる。コルヴェア文庫中のマザリナード文書の特徴としては、代表的

な雑誌やいくつかの重要文書が含まれており、数量は限られているものの、コレクションとして価値があることである。今後の課題は、東京大学のコレクションとコルヴェア文庫の販売ルートが共通しているため、両者に何らかの関係がないかどうか確認することである。

一方、コルヴェア文庫全体の目録の刊行は現時点では予定されていない。コルヴェア文庫ではマザリナード文書を特に区別して整理していないため、OPAC で検索してもマザリナード文書だけを取り出すことは困難である。そのため、その中に含まれているマザリナード文書だけの目録の作成が必要である[19]。

---

1 コルヴェア文庫は約 1 万点からなるが、現状では 7 千点余りしか OPAC で検索できない。出版年別の統計から判断して、19 世紀後半のパリコミューンに関する文書の整理がまだ進んでいないため、この数値に差が出ていると思われる。

2 早稲田大学図書館『フランス経済・社会・思想文庫（通称コルヴェア文庫）展示資料解題』1991 年には 2 点のマザリナード文書の紹介があるのみで（pp. 64-65）、コレクションについては言及されていない。

3 Vellet, Christophe, Les mazarinades à l'affiche?: Armand d'Artois et la collection de la Bibliothèque Mazarine, *Histoire et civilisation du livre*, vol. 12, 2016, pp. 51-67.

4 Blasselle, Bruno et Séverine Pascal, Le fonds des mazarinades de la Bibliothèque de l'Arsenal, *Histoire et civilisation du livre,* vol. 12, 2016, pp. 15-32.

5 Toftgaard, Anders, *Katalog over samlingen af mazarinaderi Det Kongelige Bibliotek=Catalogue de la collection de mazarinades à la Bibliothèque Royal,* Copenhagen: Det Kongekige Bibliotek, 2015.

6 Ferri, Laurent, Inter folia venenum: Les collections de mazarinades aux États-Unis (1865-2014), *Histoire et civilization du livre*, vol. 12, 2016, pp. 69-75.

7 Harvard Library, Mazarinades, URL: https://library.harvard.edu/collections/mazarinades (accessed on 4 August, 2023).

8 一丸禎子「マザリナード文書の公開に先立って―その特性と東京大学コレクションの紹介」『人文』vol. 9, 2011, pp. 97-117; 一丸禎子ほか『マザリナード探求』山岳 , 2021; 一丸禎子『フロンドの乱とマザリナード』山岳 , 2023.

9 野呂康『古典資料センター所蔵「マザリナード」の現在：附所蔵マザリナード一覧及び選集合本内容一覧』一橋大学社会科学古典資料センター , 2010 (Study Series, No. 63).

10 Moreau, Célestin, « Supplément à la Bibliographie des mazarinades », Bulletin du bibliophile et du bibliothécaire, 1862, pp. 786-829; ditto, « Supplément à la Bibliographie des mazarinades », Bulletin du bibliophile et du bibliothécaire, 1869, pp. 61-81.

11 Socard, Émile, Supplément à la Bibliographie des mazarinades, *Cabinet historique*, t. 22, 1876, pp. 223-247; Labadie, Ernest, Nouveau supplément à la Bibliographie des mazarinades, *Bulletin du bibliophile et du bibliothécaire*, 1903, pp. 293-303, 363-372, 435-443, 555-565 & 676-680; *Bulletin du bibliophile et du bibliothécaire*, 1904, pp. 91-98 & 131-141.

12 Recherches internationales sur les Mazarinades, La collection des mazarinades de Tokyo comme si vous y etiez, URL: http://mazarinades.org/edition/collections (accessed on 4 August, 2023).

13 *Louis-Nicolas-Jean-Joachim de Cayrol (1775-1859), du 29 avril au 22 mai 1861 : Catalogue des livres manuscrits et imprimés composant la bibliothèque de feu M. de Cayrol ancien député*, Paris, L. Potier, 1861.

14 Biblissima, Collection de Cayrol, URL : https://portail.biblissima.fr/fr/ark:/43093/coldata26824561c8a39e68829f7c155d20c3e38dcf82c6 (accessed on 4 August, 2023).

15 Sgard, Jean, *Dictionaire des journaux, 1600-1789*. Paris: Universitas, 1991.

[16] Carrier, H., *La Fronde : contestation démocratique et misère paysanne : 52 mazarinades*, Paris: EDHIS, 1982.

[17] Recherches internationales sur les Mazarinades, 5. Liste imprimeurs & libraires, 100, URL : http://mazarinades.org/liste-des-imprimeurs/ (accessed on 11 August 2023).

[18] 野呂康『古典資料センター所蔵「マザリナード」の現在』一橋大学社会科学古典資料センター , 2010 (Study Series, No. 63).

[19] コルヴェア文庫に含まれているマザリナード文書については、今後発表される次の目録を参照していただきたい。拙稿「早稲田大学図書館所蔵マザリナード文書目録」『早稲田大学図書館紀要』71 号 , 2024（印刷中）

旧体制（アンシャン・レジーム）下フランスにおける非正規本
―― リヨンで印刷されたエルヴェシウスの作品の場合 ――

Les publications clandestines en France sous l'Ancien Régime : le cas des versions illicites des œuvres d'Helvétius imprimées à Lyon

Clandestine publications in France under the Ancien Régime : the case of illicit versions of the Helvétius' Works printed in Lyon

坂倉　裕治
Yuji SAKAKURA

はじめに

宗教書に紛れた2巻ものの『精神論』（*De l'Esprit*）44部をリヨンで押収したという1758年10月9日付の警察記録がフランス国立図書館に残されている。押収された荷の送り状には、ブリュイゼ（Jean-Marie Bruyset, 1719-93?）の筆跡が認められるとして、この印刷・書店業者が印刷、発送したものと推測される、と記されている（BNF : NAF 1214, f°277）[1]。17世紀後半から18世紀を通じてリヨンはフランスにおける非正規本の一大制作拠点となっていた。ブリュイゼは、リヨンの出版検査官（Inspecteur de la librairie de Lyon）ブルジュラ（Claude Bourgelat, 1712-79）[2]から格別の庇護を受けて、18世紀中葉から後半にかけて、リヨン界隈ではもっとも手広く哲学、思想関係の非正規本を制作した業者であった。本稿では、『精神論』をはじめ、エルヴェシウス（Claude-Adrien Helvétius, 1715-71）のいくつかの作品がリヨンで秘密裏に印刷されていたと推測させる痕跡を整理する作業を通じて、フランス革命に先立つ旧体制下のフランスにおいて、書物の検閲システムにどのような抜け道があったのか、また、権力者たちから危険視されていた新しい思想が広まるのに非正規本がいかに大きな役割を果たしたのか、その一端を検証しようと試みる。

---

1 手稿資料については、所蔵先の略号、請求番号、資料番号または紙葉番号を本文中に指示する。所蔵先の略号は以下の通り。BNF：フランス国立図書館（Bibliothèque Nationale de France）、BML：リヨン市立図書館（Bibliothèque municipale de Lyon）、ADR：ローヌ県公文書館（Archives départementales du Rhône）、AML：リヨン市公文書館（Archives municipales de Lyon）。

2 cf. Philippe Cottereau, Janine Weber-Godde, *Claude Bourgelat : un lyonnais fondateur des deux premières écoles vétérinaires du monde, 1712-1779,* Paris : Comité Bourgelat / Lyon : ENS éditions : Fondation Meyrieux, 2011, pp. 225-263. ブリュイゼとブルジュラの格別な関係のありようについては、稿を改めて論じたい。

1．『精神論』事件

エルヴェシウスの『精神論』は、コンディヤック（Etienne Bonnot de Mably abbé de Condillac, 1714-80）によって紹介されたロック（John Locke, 1632-1704）の認識論を基盤としつつ、これを教育と立法（législation）の問題へと応用する道筋を論じた点で、フランス啓蒙思想の潮流を代表する重要な作品に数えられている。宗教に依拠しない、人間の欲望を基盤とした社会秩序と道徳をうち立てる可能性を論じたことから、刊行直後から教会関係者たち、護教論者たちによる厳しい論難にさらされた。

『精神論』がどのような経緯で販売禁止となったのか、という点については、すでにかなり掘り下げた研究が蓄積されている[3]。王権や教会に対する批判、公序良俗に反する内容を含んだ書物の印刷、流通を防ぐために王権が課した事前検閲制度を逃れるべく、18 世紀の哲学者たちはしばしば、著者の名前を伏せ、外国で印刷されたかのように装って、口頭の黙許（permission tacite）を得て作品を印刷する方法を選んだ。しかし、『精神論』は、正規の検閲手続きを経て当局から正式に出版許可を得たうえ、著者の名前をかかげて出版された。エルヴェシウスの幼少期からの友人で、ヴェルサイユの国王の狩猟場を管理する官職を父親から受け継いだ寵臣ル・ロワ（Charles-Georges Le Roy, 1723-89）の推薦によって、外務官僚テルシエ（Jean-Pierre Tercier, 1704-67）が検閲官（censeur）をつとめた。検閲官とは、出版許可を与えるのに先立って対象となる書物の原稿に問題がないかを確認するべく、その都度任命される官職である。テルシエは外交問題には詳しいものの、哲学や神学についてはまったくの素人であった。そのうえ、ル・ロワは故意に順番を入れ換えて少しずつ原稿をテルシエに渡して混乱させ、作業を急がせて修正意見をつけさせなかった。1758 年 3 月 17 日付で、テルシエは出版に問題なしと結論づけた[4]。印刷作業がかなり進んだ同年 6 月末、唯物論哲学や教会批判にかかわる内容を含んだ同書が危険であるという密告が、王権による出版統制の責任者、出版統制局長（Directeur de la Librairie）であったマルゼルブ（Chrétien-Guillaume de Lamoignon de Malesherbes, 1721-94）に届けられた[5]。マルゼルブは、バルテルミ（Jean-Jacques Barthélemy, 1716-95）を検閲官として非

---

[3] この点については、次が要を得ている。森村敏己「エルヴェシウスと『精神論』事件（1758 − 1759）」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』12、1992 年 3 月、10 ～ 14 頁。さらに、次も参照。Didier Ozanam, « La disgrâce d'un premier commis : Tercier et l'affaire de l'Esprit (1758-1759) », in *Bibliothèque de l'École des Chartes,* n° 113, 1955, pp. 140-170. David Smith, "The publication of Helvetius's *De l'Esprit*", in *French Studies,* vol. XVIII, 1964, pp. 332-344. Johon M. Rogister, « Le gouvernement, le parlement et l'attaque contre *De l'Esprit* et l'*Encyclopédie* en 1759 », in *Dix-huitième siècle*, n° 11, 1979, pp. 321-354. Christian Albertan, article « Helvétius (L'affaire (1758-1761)) », in Didier Masserau (dir.), *Dictionnaire des anti-Lumières et des antiphilosophes (France, 1715-1815)*, Paris : H. Champion, 2 vol., 2017, t. I, pp. 688-698. « Introduction », in Helvétius, *Œuvres complètes*, sous la direction de Gerhardt Stenger, Paris : H. Champion, t. I : *De l'Esprit*, texte édité, présenté et annoté par Jonas Steffen, 2016, pp. 15-24.

[4] 出版統制局の登録簿（les registres de librairie）によれば、1758 年 4 月 20 日付で出版許可がおりている。BNF : FF 21977, f° 42 r° n° 2630 *Discours sur l'Esprit*, PS. 20 av. 1758. FF 21998, f° 201 v° n° 2630.

[5] マルゼルブは、王権による出版統制を統括する立場にありながら、宗教的権威にとって脅威となりう

公式に2度目の検閲を受けるようにエルヴェシウスを説得し、その結果、あからさまに教会を批判した部分を削除したり、過激な表現を改めたりするなど、修正を加えざるをえなくなった。27箇所に及ぶ差し替えをほどこした版本が、同年7月27日になって、ようやく刊行となった。

『精神論』の刊行からほどなくして、同書の内容を知らされた王妃と王太子は激怒し、パリ高等法院も断罪文書の用意にとりかかる。エルヴェシウスとテルシエを守るべく、マルゼルブは発売からわずか10日後に販売の差し止めを命じ、8月10日には出版許可を取り消して販売を正式に禁じた。しかし、それだけではおさまりがつかず、激しい論難が続々と現れ、後に「『精神論』事件」と呼ばれることになる大騒動を引き起こした。じっさいには、標的となっていたのは、エルヴェシウスの作品そのもの以上に、むしろ、ディドロ（Denis Diderot, 1713-84）らの『百科全書』に見える、宗教的政治的権威にとって「危険」とみなされた新しい思想であった。エルヴェシウスは同様の内容の作品は二度と書かないという誓いを立て、ようやく許された[6]。

禁書の烙印を押されることが、必ずしも作品の生命を絶つわけではないことに注意が必要である。断罪が、それを行う人の意図とは裏腹に、作品を宣伝してしまう効果を持つことも少なくなかったからである。この点について、ディドロは次のように述べている。

> 禁止が厳しければ厳しいほど、それだけ書物の値段をいっそうつり上げ、その本を読みたいという好奇心をいっそうかきたて、その本がいっそう売れるようにし、いっそう読まれるようにするのである[7]。

進歩的な知識人たちの関心を引いた作品は、売れるとなれば瞬く間に続々と海賊版が制作され、密かに読まれたのだった。

2．リヨンの印刷業者と非正規本

現在、ローヌ県の県都となっているリヨンの起源は、紀元前43年、フルヴィエールの丘にローマ帝国の植民都市ルグドゥヌム（Lugdunum）が建設されたことに遡る。アウグストゥスの時代にガリアの首府となり、河川と陸路を活用してドイツ、イタリア、スイス、さらに大西洋岸にも通じる東西南北の通商ルートが交差する交易の要衝として栄えた。中世には大司教座が置かれた。15世紀には北イタリアとの交易と金融で富を蓄え、さらにイタリアから技術を

る新しい思想に対して寛容であった。次を参照。木崎喜代治『マルゼルブ』岩波書店、1986年。

6 関連する書簡、文書については菅原多喜夫氏による未刊行の翻訳（私家版、5分冊、2016年作成）がある。貴重な訳業を提供された菅原氏に謝意を表明したい。

7 Denis Diderot, *Lettre historique et politique …sur le commerce de la librairie…*, *Œuvres complètes*, t. V, Paris : Club français du Livre, 1970, p. 371.

導入して、絹織物業と印刷業が盛んになった。16 世紀前半には 420 もの印刷工房を擁したリヨンの印刷業が花開き、フランス･ルネサンスの一大中心地となった[8]。リヨンに先立って、パリではソルボンヌ大学の教員たちによって宗教書を印刷するために印刷機が導入されていた。これに対して、リヨンで印刷工房を開いたのは、リエージュ、ドイツ、スイス、イタリアなどと交易していた商人たちであり、その多くは、商業の中心であったメルシエール通り（rue mercière）およびその周辺に印刷工房や書店を構えた。こんにち旧市街に残るリヨン市立印刷博物館には、印刷技術にかかわる貴重な資料が保存されている。リヨンでは書物の制作ばかりではなく、ドイツ、イタリア、フランドルとの間で書物の交易も盛んであった。しかし、16 世紀後半にはパリの印刷業の後塵を拝するようになり、落差が急速に広がっていった。その背景として、中央の政治権力が地方に及ぼす影響力が拡大していたことが見逃せない。宗教戦争の災禍にのみ込まれた 16 世紀の終わりには、リヨンの印刷工房の数は 120 余りに減った。フランス革命期、とりわけ、1793 年の流血を伴う暴動によって、リヨンの印刷・書店業は壊滅的打撃を受け、19 世紀にはいくつかの印刷工房が生き長らえたものの、この業種における輝かしい地位を完全に失った[9]。

リヨンで印刷された書物のうち、16 世紀までに刊行されたものについてはほぼ網羅的な目録が存在する[10]。また、フランス革命を経た 19 世紀以降については、法定納本制度（dépôt légal）によって、書物の同定問題は原則として発生しない。しかし、17 世紀、18 世紀にリヨンで印刷された書物、とりわけ海賊版や禁書などの地下出版物の同定は、ごく一部にとどまっている[11]。それには、以下のような理由がある。フランスでは、17 世紀中葉に、特定の印刷出版業者にある作品を独占的に印刷、販売する権利を与える「特認（privilège）」と呼ばれる制度[12]が導入され、多くのばあい、王権の近くにあったパリの業者が優遇された。特認を与える

---

[8] cf. Dominique Varry, article « Lyon », in *Dictionnaire encyclopédique du livre*, pp. 820-821. リヨンの印刷業にとって、イタリアの影響が決定的に重要であった。cf. Silvia D'Amico et Susanna Gambino Longo (dirs.), *Le savoir italien sous les presses lyonnaises à la Renaissance*, Genève : Droz, 2017. 16 世紀に花開いたリヨンの印刷業の最盛期については、次を参照。宮下志朗『本の都市リヨン』晶文社、1989 年。

[9] リヨンにおける印刷、出版業の歴史については、以下に簡便な概略が提示されている。Dominique Varry, article « Lyon », in *Dictionnaire encyclopédique du livre*, sous la direction de Pascal Fouché, Daniel Péchoin et Philippe Schuwer, Paris : Editions du Cercle de la Librairie, 2002-2007, 3 volumes, tome II (E-M), pp. 817-822.

[10] Henri Baudrier, *Bibliographie lyonnaise : recherches sur les imprimeries, libraires, relieurs et fondeurs de lettres de Lyon au XVIe siècle*, 12 vol., publiée et continuée par Julien Baudrier, Lyon : A. Brun, 1895-1921. réimpr. Paris : F. de Nobele, 1964-65. Sybille von Gültlingen, *Bibliographie des livres imprimés à Lyon au seizième siècle*, Bibliotheca bibliographica Aureliana, Baden-Baden : Bouxwiller. V. Koerner, 11 vol.,1992-2007.

[11] 17 世紀については、差し当たり、次を参照。Marie-Anne Merland (avec la collaboration de Guy Parguez), *Répertoire bibliographique des livres imprimés en France au XVIIe siècle*, Baden-Baden ; Bouxwiller : Valentin Koerner, 1989-2010, [Collection : Bibliotheca bibliographica aureliana], vol. 5, 26, 28, 29. また、18 世紀については、地下出版物のごく一部が、Dominique Varry らの研究によって同定されるにとどまっている。

[12] cf. Henri Falk, *Les privilèges de librairie sous l'Ancien Régime : étude historique du conflit des droits sur l'œuvre littéraire,* Paris : A. Rousseau, 1906. Henri-Jean Martin, *Livre, pouvoirs, société à Paris au XVIIe siècle (1598-*

業者を首都に集中させることで、出版統制が容易になると期待されていたようである。ほんらい一定の期限が設けられていたはずの特認が延々と更新され続けることも珍しくなかった[13]。売れ筋の新刊書を印刷できなくなった地方の印刷業者たちは急速に輝きを失い、パリの業者の下請けをすることで（この場合も、不正に増刷することもあった）、あるいは、特認のついた書物の海賊版や権力によって禁じられた書物（禁書）を秘密裏に印刷することで、なんとか生き延びようとした[14]。かつて教皇庁が置かれた地としてフランスの王権が及ばなかったアヴィニヨンとならんで、とりわけリヨンとルーアン[15]では、17 世紀以降、海賊版が大量に制作された[16]。閉鎖的な同業者組合を通じて、パリの書店と対抗するために、リヨンの印刷書店業者の間で海賊版を制作、販売するためのネットワークとも呼びうるような強固な協力関係が発達した[17]。海賊版を制作したリヨンの業者に対して、特認を得ていたパリの業者が起こした訴訟、証拠品の確保のための家宅捜索、非正規本搬送中の押収などにかかわる記録文書が、海賊版の存在をこんにちに伝える主要な史料となっている。

旧体制下フランスにおける出版をめぐって、留意すべき点がほかにも存在する。通常の手続きでは出版が許可されないはずの書物について、外国で印刷されたものが輸入されたかのように装うことを条件に印刷を暗黙のうちに認めるという「黙許」の制度は、1715 年ごろにフランスに導入され、1750 年代から頻繁に用いられるようになった。タイトル・ページには著者の名前も発行者の名前も記されないものも数多くあった。ライデン、ロンドン、アムステルダムなどと印刷地を偽り、実在の、あるいは架空の発行者の名を記したものもあった。「印刷地アムステルダム（À Amsterdam）」のように大きめの活字で偽りの発行地を記し、小さな活字で「パリの ... 書店販売（Et se vend à Paris chez ... ）」などと記しているような場合のように、黙許を受けた書物であることが比較的容易に判別できる例もある。しかし、実在する外国の業

1701), Genève : Droz, 2 vol., 1969. Nicolas Shapira, « Quand le privilège de librairie publie l'auteur », in Christian Jouhaud et Alain Viala (dirs.), *De la publication entre Renaissance et Lumières*, Paris : Fayard, 2002, pp. 121-137. Claire Lévy-Lelouch, « Quand le privilège de librairie publie le roi », in Christian Jouhaud et Alain Viala (dirs.), *De la publication entre Renaissance et Lumières*, pp. 139-159.

[13] リヨンの印刷業者を代表して、ボジョラン（Antoine Beaujolin）は、特認の更新に対して 1680 年 10 月 4 日付書簡で抗議している（AML : HH100）。

[14] cf. Jacqueline Roubert, « La situation de l'imprimerie lyonnais à la fin du XVIIe siècle », in, *Cinq études lyonnaises*, Genève : Droz, 1966, pp. 77-111. Guy Parguez, « Essai sur l'origine lyonnaise d'éditions clandestines de la fin du XVIIe siècle », *Nouvelle études lyonnaises*, Droz, 1969, pp. 93-130. Dominique Varry, « Le livre clandestin à Lyon au XVIIIe siècle », *La lettre clandestine*, n° 6, 1997, pp. 243-252. Dominique Varry, « Une géographie de l'illicite : les espaces du livre à Lyon au temps des Lumières», *La lettre clandestine*, n° 8, 1999, pp. 113-133.

[15] 旧体制下ルーアンの印刷・書店業については、さしあたり次を参照。Jean-Dominique Mellot, *L'édition rouennaise et ses marchés (vers 1600- vers 1730) : dynamisme provincial et centralisme parisien,* Paris : École des Chartes, 1998.

[16] ヴァリーによれば、16 世紀はじめには、ヴェネチア出身の業者たちによって海賊版が制作されていた。D.Varry, article « Lyon », in *Dictionnaire encyclopédique du livre*, t. II, pp. 820-821.

[17] cf. Anne Béroujon, « Les réseaux de la contrefaçon du livre à Lyon dans la seconde moitié du XVIIe siècle, in *Histoire et civilisation du livre,* vol. II, Genève : Droz, 2006, pp. 85-111.

者の名を記した版本については、実際に印刷した業者を同定することが困難である[18]。

海賊版の中には、特認によって守られた正規本よりも安価な価格で売る必要から、制作費の中でも特に大きな割合を占める用紙について品質を必要最低限なレヴェルまで落とし、小さな判型にできるだけ活字を詰めて印刷した、粗悪な廉価版も数多くあった。その一方で、「差し替えなし版（édition sans cartons）」などとして正確な版本であることをうたったり、本体となる作品に関連する文書（断罪文書、断罪に対する反論など）を併録したりして、正規本にはない付加価値によって売ろうとするものもあった。地下出版されたものの中には、こんにちに名を残す著述家の作品もあれば、政府への批判、宗教的に異端とされる主張、性的な内容を含んだ、こんにちではすっかり忘れ去られた作品もある。売れるものは何でも印刷されたのだった。

海賊版の制作・販売によって、単に生き延びるだけでなく、富を築く業者もあった。リヨンでは、ジャン＝マリ・ブリュイゼが、デュプラン家（les Duplain）とともに、その筋で名を残している[19]。17 世紀後半から 19 世紀の前半にかけ 4 世代にわたってリヨンの印刷･書店業の歴史に名を刻んでいるブリュイゼ家にあって、もっとも商業的成功をおさめたジャン＝マリは、王権の下で出版統制に関わっていた官吏たちをつぎつぎに味方につけて、その手厚い庇護の下で厚顔無恥にふるまっていたらしい。ブリュイゼの印刷工房と書店はリヨン市内のメルシエール通り界隈にあったものの、自らが制作した海賊版や不正に輸入した書籍の在庫は、印刷業に直接かかわらない別業種の職人の家や、家宅捜索のために警察が踏み込むのを躊躇するような神聖な場所（たとえば、修道院の個室）、地下倉庫、市外の秘密倉庫などに巧妙に隠されていたらしい。店舗では、辞書、手引き書、宗教書など、問題のない正規本の後ろ側に海賊版を隠して陳列する手法で販売していた。もともと、リヨンでは、印刷工房、書物を販売する店舗、住居を分ける業者が多く、市外に倉庫を持つ者もめずらしくなかった。また、頻繁に転居する業者もあった。こんにち、こうした「不正」の実態の全容を解明することはきわめて困難な状況にあり、家宅捜索の記録などによって、かろうじてわずかな手がかりを伺い知ることができるにとどまる。壁や家具で隠された扉が、パリの書店の執拗な捜索によって暴かれた例なども記録されている[20]。ブリュイゼは、リヨンで違法な海賊版を印刷、販売しただけでなく、アヴィニョン、ジュネーヴ、ヌーシャテルで印刷された書物を運び込んで販売していた。また、逆に、自分が印刷した海賊版をこれらの街でも販売するルートを作っていた。

---

[18] cf. Dominique Varry, « Une édition de 1764 des *Œuvres* de Montesquieu sous fausse adresse d'Amsterdam restituée à l'imprimeur-libraire lyonnais Jean-Marie 1 Bruyset », *Montesquieu, œuvre ouverte? (1748-1755) : actes du colloque de Bordeaux* (6-8 décembre 2001, Bordeaux, bibliothèque municipale), présentés et publiés par Catherine Larrère, *Cahiers Montesquieu,* 9, Napoli : Liguori / Oxford : Voltaire Foundation, 2005, p. 69.

[19] cf. Sheza Moledina et al., *Sur les pas des imprimeurs lyonnais*, Lyon : éditions livres EMCC, 2012, pp.79-82. ブリュイゼ一族については、稿を改めて詳しく論じたい。cf. Dominique Varry, « Une famille de libraires lyonnais turbulents : les Bruyset », *La lettre clandestine*, nº 11, 2003, pp. 105-127.

[20] cf. Dominique Varry, *op.cit.,* 1999, pp. 116-117, 124-125.

３．リヨンで印刷されたと推測される『精神論』

冒頭で触れた警察の押収記録に記されたリヨンの印刷・書店業者ブリュイゼが印刷したとされる海賊版『精神論』について、残された情報はごくわずかである。しかし、エルヴェシウスの著作に関する現時点でもっとも包括的と目されるスミスの目録[21]と照らし合わせると、リヨンで印刷された可能性のある 1758 年以前に発行の 2 巻本の『精神論』は、E.6 および E.7 と付番された 2 点のみで、いずれも 12 折判である。スミスの目録に依拠して、同定に必要な最小限の情報を拾っておこう。

E.6 1758, 2 vol, in 12º（BNF : R38302 ～ 38303）
DE / L'ESPRIT. / [...] / *A PARIS,* / Chez DURAND, Libraire, rue du Foin. / M.DCC.LVIII. / *Avec Approbation & Privilege du Roi.* Vol. 1 2-448; misprinting 434 as 344. Vol. 2 2-452.

E.7 1758, 2 vol. in 12º（BNF : R12296 ～ 12298）
DE / L'ESPRIT. / [...] / *A AMSTERDAM,* / Chez ARKSTÉE & MERKUS, Imprimeurs / Libraires. / M.DCC.LVIII. / Vol. 1 2-450; misprinting 36 as 6, 235 as 135, 377 as 373. Vol. 2 2-452.

両者の本文に使われている版は同一ではないものの、使用されている活字セット、版組ルール、装飾に著しい類似が認められ、同じ印刷工房で制作された可能性がきわめて高いと推測される。さらに、同目録で E.16 と付番された版本にも同様の特徴が認められる[22]。

E.16 1761, 2 vol, in 12º（筆者所蔵）
DE / L'ESPRIT. / [...] / *A AMSTERDAM,* / Chez ARKSTÉE & MERKUS, Imprimeurs-/ Libraires./ M.DCC.LXI. / Vol. 1 i-xij, 1-467; misprinting * as 3*. Vol. 2 1-504 （文末図版 1、2 参照）

いずれも、タイトル・ページに著者の名前を記していない。同じ印刷工房で制作されたとすれば、E.6、E.7、E.16 の順に印刷されたであろうと推測される。この推測の根拠は以下のとおりである。E.6 には付録がないうえ、3 つの判本のうち唯一、タイトル･ページの発行年の下に、出版許可と特認を得たことが記されている。断言はできないものの、出版許可取り消し以前に印刷された可能性がある。この版本には、他の 2 つの版本では序文の次にくる、「読者への覚

[21] David Smith, *Bibliography of the Writings of Helvétius*, Ferney-Voltaire, Centre international d'étude du XVIIIe siècle, 2001, pp. 155-159, 187-191.

[22] リヨンで押収された版本について、ヴァリーは、スミスの文献目録の E.7 か E.16 が該当すると推測している。Dominique. Varry, *op.cit.,* 2003, p. 117. しかし、E.16 には 1761 年という刊行年が記されている。E.6 の誤記であろうか。

え書き」が欠けている。さらに、流通した正規初版本、および E.7、E.16 には見られない、不注意と思われる誤植が散見される。第 1 巻からいくつかを例示してみよう。（　）内は正しい語である。

page 2 ligne 14 : L'ame est la faculté（L'une est la faculté）
p.2 l.30 : Si la matiere（Si la nature）
p.23 l.13 : arracher une idée nette（attacher une idée nette）
p.30 note l.3 : payant（paysan）

E.7 と E.16 の巻末には E.6 にはない付録がつけられている。E.7 には『精神論』を断罪したパリ大司教ボーモン（Christophe de Beaumont, 1703-81）による教書（Mandement de Monseigneur l'archevêque de Paris）が、E.16 にはこの教書に加えて、「『精神論』のカテキズム」と、断罪文書に反論した「『精神論』と題された書物に対する諸批判の検討」が付されている。制作時期によって「付録」が増えていったのだと考えるのが妥当であろう。なお、「諸批判の検討」は無署名であるものの、フランス国立図書館の目録などでは、『精神論』の検閲官にテルシエを推薦したル・ロワの手になるものとされている。

これら 3 つの版本に見られる装飾には、ブリュイゼが正規の手続きによって印刷した版本の装飾と著しい一致が認められる（図版 1、2、3、4 参照）ものの、同様の装飾はリヨンの他の印刷業者の手になる書物にも使われているのが確認されるため、これをもって印刷業者を同定する決定的根拠とすることはできない。

これら 3 つの版本で使用されている用紙の透かしは一致しない。ただし、E.16 の第 1 巻の用紙のウォーターマークが、ブリュイゼが実名で印刷した宗教書など[23]のそれと一致するのを確認した。18 世紀には紙の流通範囲が比較的限られていたため、用紙によって印刷された街をほぼ特定可能であると考えられる。しかし、同じ用紙を複数の業者が使用していた可能性を排除することができないため、現在の研究の状況では用紙によって印刷工房を特定する根拠とすることはできない。

以上、筆者の調査によって確認された痕跡は、これら 3 つの版本がリヨンで印刷されたと推測するにたる状況証拠とはなりえても、印刷業者を特定する決定的根拠にはならないと考える。冒頭で触れた警察記録と合わせて、ブリュイゼが印刷した可能性が高いと推測しうるに留まる。

---

[23] M. Durand [Pierre-Toussaint Durand de Maillane], *Histoire du droit canon : pour servir d'introduction à l'étude du droit canonique*, Lyon : Jean-Marie Bruyset, 1770.（BNF : E-5921 ; 早稲田大学 F320 00014）. [Jean Paganucci], *Manuel historique, géographique et politique des négocians, ou Encyclopédie portative de la théorie et de la pratique du commerce*, 3 vol., Lyon : Jean-Marie Bruyset. 1762 [サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館 : 8 R 963 (28-30) INV. 3780 3782 FA]. 後者は、バルビエによれば、リヨンで 1761 年 2 月 4 日付で発行された出版許可とヴェルサイユで同年 9 月 27 日に発行された特認をつけて出版されている。Antoine-Alexandre Barbier, *Dictionnaire des ouvrages anonymes*, s.l., s.n., 1875, t. III, col. 54.

４．リヨンで印刷されたと推測される『人間論』

『精神論』の発売禁止により、禁書作家となったエルヴェシウスは、1759 年 2 月、パリ高等法院での審議において、今後は『精神論』と同様の内容の書物は決して書かない、と誓いを立てていた。しかし、密かに執筆作業を続けており、いくつかの遺稿を残して、1771 年 12 月 26 日、失意のうちにこの世を去った。とくに『人間論』、詩集『幸福』の二つの作品は、正規の出版手続きをとらずに次々と印刷された。比較的早い段階で現れた版本のなかに、やはり、リヨンで印刷されたと推測されるものがある。

スミスが H.4、H.5、H.6 と付番した『人間論』の 3 つの版本には、装飾について先に見たリヨンで印刷されたと推測される『精神論』と著しい類似が認められ、同じ印刷工房で制作された可能性があると推測される。

H.4 Londres, 1773, 2 vol. in 12º（名古屋大学 : 貴 135 Ziyusiso 135.3/ H/ 62N-951 ～ 952 ; 早稲田大学 : 文庫 22 / 398 1 ～ 2）

DE / L'HOMME, / DE / SES FACULTÉS / *INTELLECTUELLES*, / ET DE / SON ÉDUCATION / Ouvrage Posthume de M.HELVÉTIUS / A LONDRES, / Chez LA SOCIÉTÉ TYPOGRAPHIQUE. / M.DCC. LXXIII.

Vol. 1 [i-iv] [v] vj-x [xi] xij-xliij [1] 2-399 ; misprinting xxix as xxvix, 361 as 341; not paginating 316 and 344.

Vol. 2 [1] 2-495; misprinting 446 as 442, 447 as 443, 449 as 452, 452 as 449, 470 as 70.

H.5 Londres, 1774, 2 vol. in 12º（慶應義塾大学 : 120Y1007@2@1 ～ 2）

DE / L'HOMME, / *DE* / SES FACULTÉS / *INTELLECTUELLE*, / ET DE / *SON ÉDUCATION* / Ouvrage Posthume de M.HELVÉTIUS / *A LONDRES,* / Chez LA SOCIÉTÉ TYPOGRAPHIQUE. / M.DCC. LXXIV.

Vol. 1 [i-vii] viij-xij [xiii] xiv-xl [1] 2-231 [*1*]^2 1-123.

Vol. 2 [1-5] 6-462.

H.6 Londres, Société typographique, 1774, 2 vol. in 12º（筆者所蔵）

DE / L'HOMME, / *DE* / SES FACULTÉS / *INTELLECTUELLES*, / ET DE / *SON ÉDUCATION* / Ouvrage Posthume de M.HELVÉTIUS/ *A LONDRES,* / Chez LA SOCIÉTÉ TYPOGRAPHIQUE. / M.DCC. LXXIV.

Vol. 1 [i-vii] viij-xij [xiii] xiv-xl [1] 2-354.

Vol. 2 [1-5] 6-462. misprinting 49 as 36 (with a I above it), 53 as 54, 261 as 362, 289 as 291 ....

なお、H.6 第 2 巻の用紙のウォーターマークが E.16 第 1 巻のそれと一致するのを確認した。

5．リヨンで印刷されたと推測される『幸福』

遺稿詩集『幸福』について、旧体制下のリヨンで印刷された書物に関する研究において第一人者と目されるヴァリーは、スミスが B.2 と付番した版本がジョフロワ・ルニョー（Geoffroy Regnault, 1710-179?）によってリヨンで印刷されたと推測している[24]。

B.2 Londres [i.e. Lyon], 1772, in 8° （BNF : Ye10119 ; 早稲田大学 : 文庫 22 237）
LE BONHEUR, / POÉME, / *EN SIX CHANTS.* / Avec des Fragments de quelques Épîtres. / *Ouvrage posthumes de M.HELVÉTIUS./ A LONDRES.*/ M.DCC.LXXII.
[i] ii-cxx [1] 2-18 [19] 20-32 [33] 24-54 [55] 56-68 [69] 70-80 [81] 82-102 [103] 104-116.

ルニョーもまた、リヨンで代々印刷業に従事した家系に生まれた[25]。リヨンの出版検査官ブルジュラによる 1763 年 12 月 24 日付の通信文によれば、ルニョーの印刷工房は 3 機の印刷機を備え、海賊版を手広く制作していたらしい（BNF : FF22128, f°s 291-302）[26]。また、1759 年に、リヨンではじめてとなる貸本屋を開いている[27]。

たしかに、ヴァリーが指摘しているように、B.2 には、正規の手続きをふまえてルニョーが自らの名を掲げて刊行した書物に見られる装飾との一致が複数認められるうえ、飾り文字の特徴も酷似している。たとえば、B.2 のサン＝ランベールによる序文の冒頭に付された装飾（p. i）である[28]。しかし、同じ金型から制作された装飾が複数の印刷業者で使用されたり、業者間で貸し借りされたりもしたので、装飾が一致しただけでは印刷業者を特定することはできまい。B.2 には、H.5、H.6 と特徴を著しく類似する装飾も多数用いられており、そのうちの複数の装飾が、ブリュイゼ、あるいはその他のリヨンの印刷業者によって用いられている例に事欠かな

---

[24] 次のウェッブ・ページを参照。« La fausse adresse “Londres” au XVIIIe siècle », http://dominique-varry.enssib.fr/Fausse%20adresse%20Londres
やはり、オーナメントを手がかりとして、次の研究も B.2 は H.4 とともに、ルニョーの印刷工房で制作されたと推測している。Claudette Fortuny, « Les éditions lyonnaises de l’*Histoire des deux Indes* de l’abbé Raynal », *Histoire et civilisation du livre*, Genève : Droz, 2006, Vol. 2, pp. 176, 181.

[25] 1710 年 8 月 17 日、サン＝ニズィエ Saint Nizier 教区で洗礼を受けた記録が残っている。AML : 1GG.64 f° 43 v°. なお、この一族の名には、Renaud や Rounaud など複数の綴りが認められ、いずれを採るかによって音が異なる可能性がある。本稿では便宜的に、こんにちの研究者の間で一般的に用いられている綴りに従う。

[26] cf. Léon Moulé, « Rapport de C. Bourgelat sur le commerce de la librairie et de l’imprimerie à Lyon », *Revue d’histoire de Lyon*, tome XIII, 1914, p. 53.

[27] cf. Paul Benhamou, “Reading trade of Lyon : Cellier’s cabinet de lecture”, *SVEC*, 308, 1993, pp. 305-321.

[28] *Voyage au mont-Pilat, dans la Province du Lyonnois...*, A Avignon, Et se vend A LYON, Chez Regnault, Imprimeur-Libraire, grande rue Merciere, M.DCC.LXX, [Bibliothèque Sainte-Geneviève : S1569], p. 1.

い。さらに、用紙のウォーターマークが、E.16 および正規の手続きを経てブリュイゼが出版した書物のそれと一致しているのを確認した（注 23 参照）。

なお、スミスは、『幸福』の 3 つの版本（B.9, B.10, B.12）がリヨンの印刷業者バレ（Jean-Marie Barret, 1731-86）によって制作された可能性があると指摘している[29]。この業者については、残念ながら今回は論じる用意がない。ここでは、これらの版本の組版、装飾が、B.2 とはまったく異なっていることを指摘するにとどめたい。

6．リヨンで印刷されたと推測される『エルヴェシウス全集』

最も早い段階で現れた『エルヴェシウス全集』も、リヨンで印刷されたようである。スミスは、1774 年に 8 折判 4 巻本として刊行された全集（O.1）について、タイトル・ページには発行地がリエージュと記されているものの、実際にはリヨンで印刷された版本だと推測している[30]。スミスの目録から同定に必要な最小限の書誌情報を拾っておこう。

O.1 Liège, Bassomierre [i.e. Lyon] , 1774, 4 vols, in 8º（BNF : 8-Z28818 ～ 28820 ; 筆者所蔵）
ŒUVRES / COMPLETTES / *DE* / M. HELVÉTIUS / *TOME PREMIER.* [*SECOND. TROISIEME. QUATRIEME.*]
Vol. 1 Half-title DE / *L'ESPRIT* [i] ij-viij [1] 2-58 [58] 59-620 [621] 622-634.
Vol. 2 Half-title DE / *L'ESPRIT* [1] 2-80 79-191194-223 [224] 225-226.
Half-title *LE BONHEUR* [i-iii] iv-civ [105] 106-118 [119] 120-130 [131] 132-148 [149] 150-160. [161] 162-170 [171] 172-188 [189] 190-202; misprinting lxxxiii as lxxiij.
Vol. 3 Half-title DE / *L'HOMME* [i-vii] viij-xvj [1] 2-482 [483] 484-495; misprinting 327 as 325.
Vol. 4 Half-title DE / *L'HOMME* [1] 2-596 [597] 598-615; misprinting 429 as 427.

この全集の第 1 巻には『精神論』の前半を、第 2 巻には『精神論』の後半と遺稿詩集『幸福』を、第 3 巻と第 4 巻には『人間論』を収めている。特に、第 2 巻の 2 つの作品には、それぞれ別々にノンブルがふられており、使用されている活字セットや組版ルールもまったく異なっている。それぞれの作品の組版ルール、装飾などは、すでにみたリヨンで印刷されたと推測される版本と酷似している。『幸福』（B.2）がルニョーによって印刷されたとするヴァリーの推測が正しいとすれば、この全集の制作にあたって、ブリュイゼとルニョーが協力していたのであろうか[31]。その可能性を排除するにたる根拠は発見できなかった。しかし、この全集を構成す

[29] D. Smith, *op.cit.*, pp. 264-269, 272-275.
[30] *ibid,* pp. 1-11
[31] 両者が協力関係にあったとすれば、1760 年代にルソーの『社会契約論』の海賊版をめぐってリヨンで起こった騒動との関連で興味深い。拙稿「リヨンの印刷業者レギヤによる海賊版『社会契約論』(1762 年)

る 4 つの巻にはくりかえし同じ装飾が使用されており、すべての巻が同じ印刷工房で制作された可能性も排除できない。

これまで言及してきたエルヴェシウスの諸著作の版本がリヨンで印刷されたことについては、ほぼ間違いないと推測されるものの、研究の現状に鑑みると、印刷工房を特定する決定的根拠としうる情報にいきついたとはいいがたい。

7．パリとリヨンをつなぐ補助線か？

『精神論』の正規初版本のタイトル・ページには版元としてデュラン（Laurent Durand, 1712?-63）の名がかかげられている。こんにち、デュランは、『真価と美徳についての試論』（1745）、『哲学断想』（1746）、『不謹慎な宝石』（1748）、『盲人書簡』（1749）といったディドロの作品を正規の手続きを経ずに秘密裏に出版したほか、『百科全書』の 4 名の共同出版者にも名を連ねていたことで知られている[32]。デュランについて、パリの出版検査官、デメリー（Joseph d'Hémery, 1722-1806）[33] は、「このうえなく疑わしく狡猾な書店業者」（BNF : FF 22108, f°26）[34] と評価していた。実際、宗教書などを正規の手続きで出版するとともに、公式、非公式に哲学書の出版にもかかわっていた。1746 年にアムステルダムのモルティエ（Pierre Mortier）の名を版元としてかかげて印刷されたコンディヤックの『人間認識起源論』も、ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-78）の証言によれば、デュランが版元であった[35]。よく知られているように、世界の秩序を根拠にその造り手たる神の存在を証明しようとする議論を退ける唯物論的無神論を展開した『盲人書簡』のために、ディドロは 3 ヶ月にわたって、ヴァンセンヌに投獄された。この件で、著者に先立って警察の取り調べを受けたのはデュランであった。1749 年 8 月 1 日、トゥサンの『習俗論』とともに、『哲学断想』、『不謹慎な宝石』、『盲人書簡』を出版したことを自白し、これらの著者の名と印刷した業者を明かした。恭順の意を示したデュランは逮捕を免れている（BNF : NAF 1311, f°10）。

制作の舞台裏―旧体制下フランスにおける禁書・海賊版の地下出版と出版統制の綾―」『日本 18 世紀学会年報』第 35 号、2020 年 10 月、52 ～ 66 頁、参照。なお、オーナメントを手がかりとして、次の研究は、本全集の第 1、2 巻をフォシュー（Claude André Faucheux）が、第 3、4 巻をヴィアロン（Claude André Vialon）が、それぞれ制作したと推測している。Claudette Fortuny, *op.cit.*, p. 181.

[32] cf. Frank A. Kafker, Jeff Loveland, « Diderot et Laurent Durand, son éditeur principal », *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, 2005, n° 39, pp. 29-40.

[33] この人物の伝記情報については次を参照。Ernest Coyecque, *Inventaire de la collection Anisson sur l'histoire de l'imprimerie et la librairie, principalement à Paris*, Paris : E. Leroux, 1900, 2 vol., t. I, pp. i-li. Albert Labarre, article « Hémery, Joseph d' », dans le *Dictionnaire biographie française*, Paris : Letouzey et Ané, t. XVII, 1989, pp. 888-889. Jean-Dominique Mellot, article « Hémery, Joseph d' », dans le *Dictionnaire encyclopédique du livre*, sous la direction de Pascal Fouché et al., Paris : éd. Du Cercle de la Librairie, 2002-2011, 3 vol., t. II., 2005, pp. 465-466. Jean-Dominique Mellot, Marie-Claude Felton et Élisabeth Queval, *La police des métiers du livre à Paris au siècle des Lumières*, Paris : BNF Éditions, 2017, pp. 15-23.

[34] cf. Jean-Dominique Mellot, Marie-Claude Felton et Élisabeth Queval, *op.cit.*, p. 207.

[35] Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes*, Paris : Gallimard, 5 vol., 1959-1995, t. I, p. 347.

ここで、エルヴェシウスの著作の非正規本を制作したと推測されるリヨンの印刷業者とデュランをつなぐ補助線となりうるかもしれない 2 点の書籍に触れておきたい。まず、こんにちカジョ（Dom Jean-Joseph Cajot, 1726-79）に帰せられているルソーの『エミール』に対する批判書である。

LES / PLAGIATS / DE M. J. J. R. DE GENEVE, / *SUR* / L'ÉDUCATION [...] / D. J. C. B./ A LA HAYE ; / *Et se trouve à Paris*, / Chez DURAND ; Libraire, rue S. Jacques, / à la Sagesse. / M. DCC. LXVI. XXII-[2]-378-6 p（BNF : 8-Z-10380[36] ; 早稲田大学 : 文庫 22 2231 ; 慶應義塾大学 : PDB@371.235@R1@2 ; 筆者所蔵）.

この批判書に注目する理由は次の 4 点である。

1）この版本の装飾には、『精神論』（E.6, E.16）、『人間論』（H.4, H.5, H.6）、『幸福』（B.2）、『全集』（O.1）で使用された装飾と著しい一致が認められる（図版 5、7 参照）。
2）タイトル・ページには、印刷者の名前を記さずに、デン・ハーグと、おそらくは偽りの発行地を記したうえで、パリのデュラン書店で販売されていることをうたっている。これは黙許を得て印刷された書物にしばしば見られる表記である。
3）『エミール』への参照箇所が 12 折判の「リヨンで印刷された海賊版」（p.xxiii）に依拠しているとわざわざ断わっている。実際、本文で指示されるすべてのページが、ブリュイゼがリヨンで印刷した海賊版[37]と完全に一致することが確認された（図版 6 参照）。
4）この版本の巻末には、6 頁にわたるデュラン書店に在庫の新刊書、近刊予定書の目録が付せられている。パリのデュラン書店で販売されていた可能性を示唆するものだと考える。なお、1763 年版のリヨンのブリュイゼ書店の在庫目録には、この作品は記されていない[38]。

1）と 2）の 2 点については、ルソーに対する別の論難文書にも同様に認められる。

LETTRES / D'UN / PHILOSPHE SENSIBLE, / PUBLIÉES / *Par M. DE LACROIX.* / *A LA HAYE ;* / *Et se trouve* / A PARIS, / Chez DURAND, Neveu, rue Saint- / Jaques, à la Sagesse. / M. DCC. LXIX. xv + 276p. [BNF : Y2_9588]

これら 2 点の批判書に残されたわずかな情報が示唆するのは、ブリュイゼとおぼわしきリヨ

---

36 フランス国立図書館のデジタル・アーカイヴ、ガリカで画像ファイルを参照可能である。https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k9633336p.r=josephe%20cajot?rk=42918;4#

37 スイスをはじめ、主としてドイツ語圏で流通したこの版本については、次の拙稿を参照。「旧体制下フランスにおける地下出版－リヨンの印刷業者ブリュイゼによる海賊版『エミール』（1762 年）制作の舞台裏－」、『一橋大学社会科学古典資料センター Study Serises』No.76、2020 年 3 月、7 ～ 22 頁。

38 *Catalogue des livres françois sur toutes sortes de matieres, qui se trouvent à Lyon, chez Jean-Marie Bruyset*, 1763 [BML : Cote : 371371 T. 11 (3)].

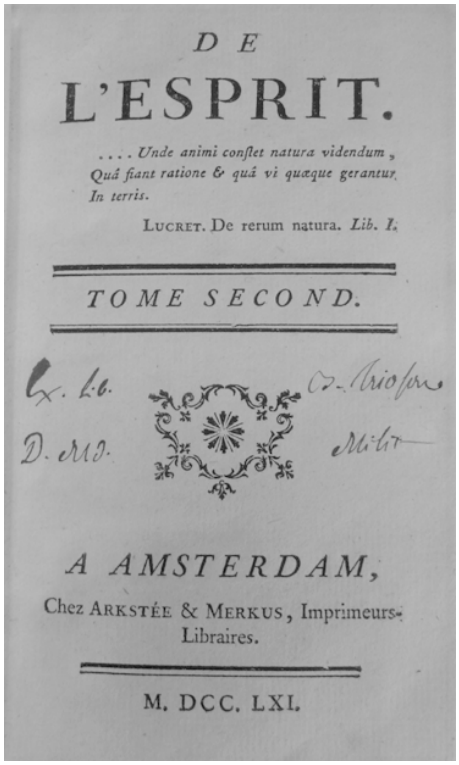
ンの印刷業者が、『精神論』の正規版元であったパリのデュラン書店のために黙許を得た書物を印刷していた可能性である。あるいは、ブリュイゼは、デュランの名前を隠れ蓑として利用したのかもしれない。情報の乏しさに鑑みて、現段階で両者の関係のありようを確認することはできない。関連する資料を発見すべく、さらに調査を続けたい。

おわりに

王権や有力貴族に近かったごく一部の業者たちに特定の書物の印刷、販売を排他的に認める特認制度の裏で、特認のついた書物や禁書を秘密裏に印刷する地下出版に手を染める業者たちが存在した。危険を冒して売れるものならなんでも印刷する、このような業者たちが存在しなかったとしたなら、こんにち古典として読み継がれている数多くの作品が日の目をみることさえなかったかもしれない。秘密裏に流通した非正規本は、しばしば、正規本よりも早く広まって読者の手に渡った。作品の影響力を広げることに一定の貢献をなしたのである。

これまで大学図書館などでは、古典作品の正規初版本が競うように求められ、宝物として大切にされてきた。これに対して、非正規本には必ずしも正当な注意が払われてきたとはいいがたい。しかし、正規の手続きを経ずに印刷された版本をめぐって残された断片的な情報は、旧体制下にあって危険視されていた新しい思想を綴った書物がどのように流通し、広まったのかをあとづけるための有力な手がかりを与えてくれる可能性がある。旧体制下のフランスで制作された非正規本の多くは、こんにち、その印刷者や流通経路を確定することがきわめて困難な状況にある。エルヴェシウスの作品は、『精神論』がひきおこした騒動、著者に対する批判的なまなざしのために、相対的に豊かな情報が残されている稀有な事例といえる。本稿でとりあげた、リヨンで非正規に印刷されたと推測されるエルヴェシウスの作品には、装飾や組版ルールといった物理的な特徴に顕著な系統性が認められることから、より同定が困難な同時代の著述家の作品について、同じ街で制作された非正規本を検討するための有益な手がかりを提供しうると考える。

〔**付記**〕本稿の準備にあたり、リヨンの市立パール＝デュー図書館、市立印刷博物館、科学文芸アカデミー資料室、高等師範学校付設ディドロ図書館、市公文書館、ローヌ県公文書館、パリのフランス国立図書館（トルビアック、アルスナル、リシュリュー）、マザラン図書館、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、名古屋大学、一橋大学、慶應義塾大学、早稲田大学で貴重な資料の閲覧を許された。この場を借りて、関係各位に謝意を表明したい。文末にまとめた図版は、いずれも筆者が所蔵する版本を撮影したものである。なお、本稿とほぼ同じ内容のフランス語論文が、次のように公になっている。Yûji Sakakura, « Les publications clandestines en France sous l’Ancien Régime : le cas des versions illicites des œuvres d’Helvétius imprimées à Lyon », *Historia philosophica*, vol. 20, Pisa / Roma : Fabrizio Serra editore, nov., 2022, pp. 87-99.



DE

L'ESPRIT.

.... *Unde animi conſtet natura videndum,*
Quâ fiant ratione & quâ vi quæque gerantur
In terris.

LUCRET. De rerum natura. *Lib. I.*

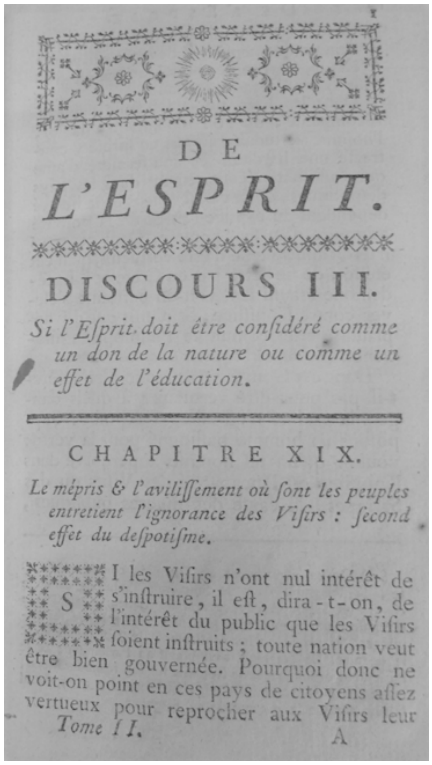
TOME SECOND.

A AMSTERDAM,

Chez ARKSTÉE & MERKUS, Imprimeurs-Libraires.

M. DCC. LXI.

【図版 1】E.16



DE

L'ESPRIT.

DISCOURS III.

Si l'Eſprit doit être conſidéré comme un don de la nature ou comme un effet de l'éducation.

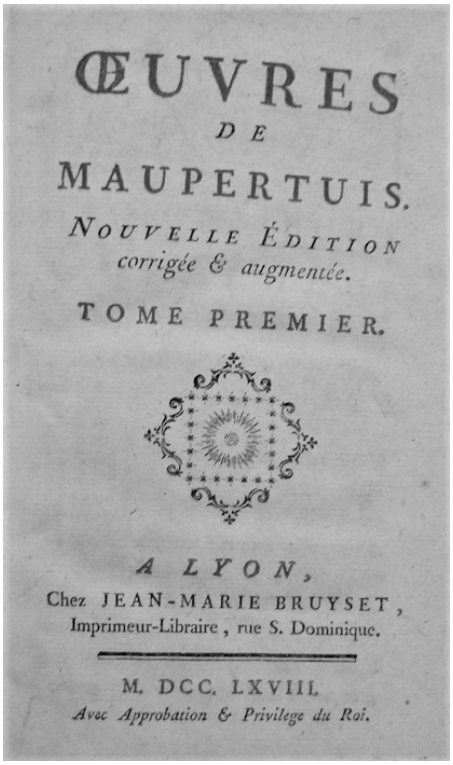
CHAPITRE XIX.

Le mépris & l'aviliſſement où ſont les peuples entretient l'ignorance des Viſirs : ſecond effet du deſpotiſme.

SI les Viſirs n'ont nul intérêt de s'inſtruire, il eſt, dira-t-on, de l'intérêt du public que les Viſirs ſoient inſtruits ; toute nation veut être bien gouvernée. Pourquoi donc ne voit-on point en ces pays de citoyens aſſez vertueux pour reprocher aux Viſirs leur

Tome II. A

【図版 2】E.16



ŒUVRES

DE

MAUPERTUIS.

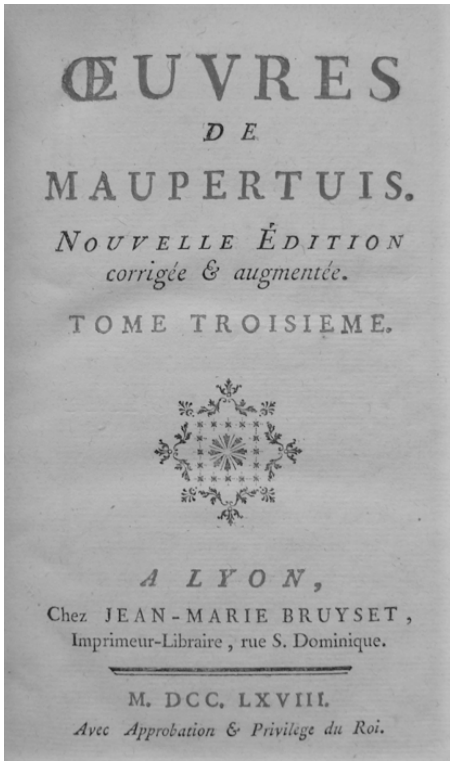
NOUVELLE ÉDITION
corrigée & augmentée.

TOME PREMIER.

A LYON,

Chez JEAN-MARIE BRUYSET,
Imprimeur-Libraire, rue S. Dominique.

M. DCC. LXVIII.
Avec Approbation & Privilege du Roi.



ŒUVRES

DE

MAUPERTUIS.

NOUVELLE ÉDITION
corrigée & augmentée.

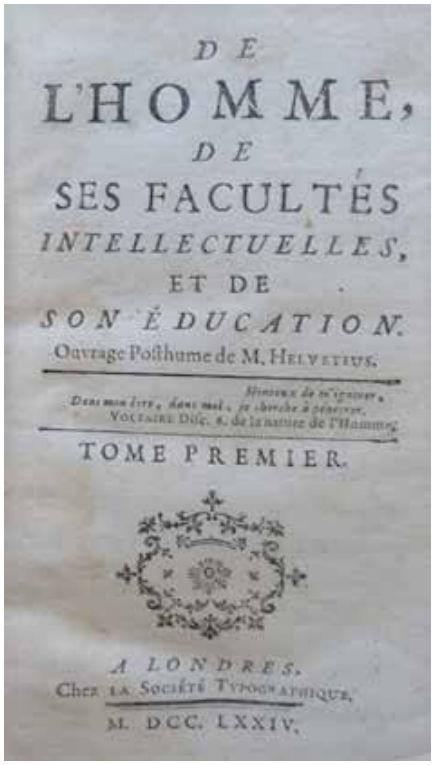
TOME TROISIEME.

A LYON,

Chez JEAN-MARIE BRUYSET,
Imprimeur-Libraire, rue S. Dominique.

M. DCC. LXVIII.
Avec Approbation & Privilege du Roi.

【図版 3、4】J.-M. ブリュイゼが正規の手続きで出版した『モーペルチュイ著作集』



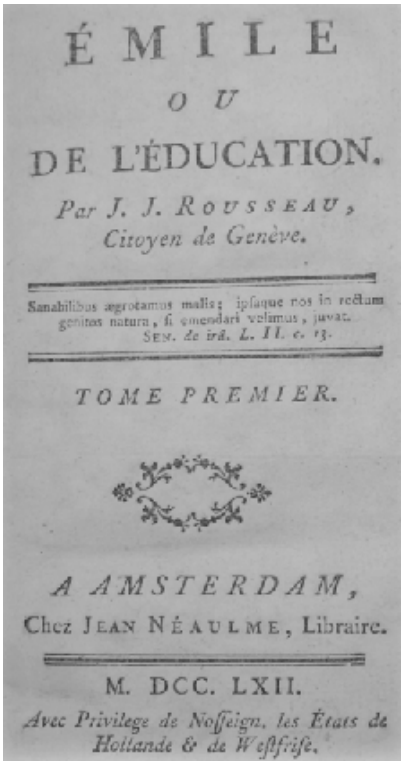
DE
L'HOMME,
DE
SES FACULTÉS
INTELLECTUELLES,
ET DE
SON ÉDUCATION.
Ouvrage Posthume de M. HELVETIUS.

Honteux de m'ignorer,
Dans mon livre, dans moi, je cherche à pénétrer.
VOLTAIRE Dis. s. de la nature de l'Homme.

TOME PREMIER.

A LONDRES.
Chez LA SOCIÉTÉ TYPOGRAPHIQUE.
M. DCC. LXXIV.

【図版 5】H.6



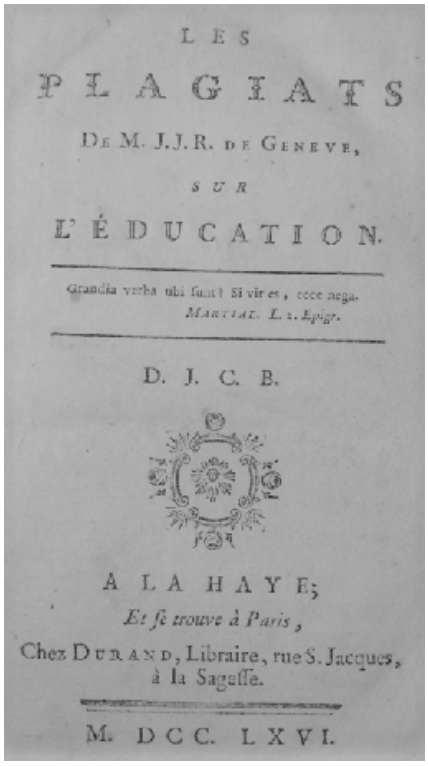
ÉMILE
OU
DE L'ÉDUCATION.
Par J. J. ROUSSEAU,
Citoyen de Genève.

Sanabilibus ægrotamus malis; ipsaque nos in rectum genitos natura, si emendari velimus, juvat.
SEN. de irâ. L. II. c. 13.

TOME PREMIER.

A AMSTERDAM,
Chez JEAN NÉAULME, Libraire.
M. DCC. LXII.
Avec Privilege de Nosseign. les États de Hollande & de Westfrise.

【図版 6】J.-M. ブリュイゼが印刷した海賊版『エミール』

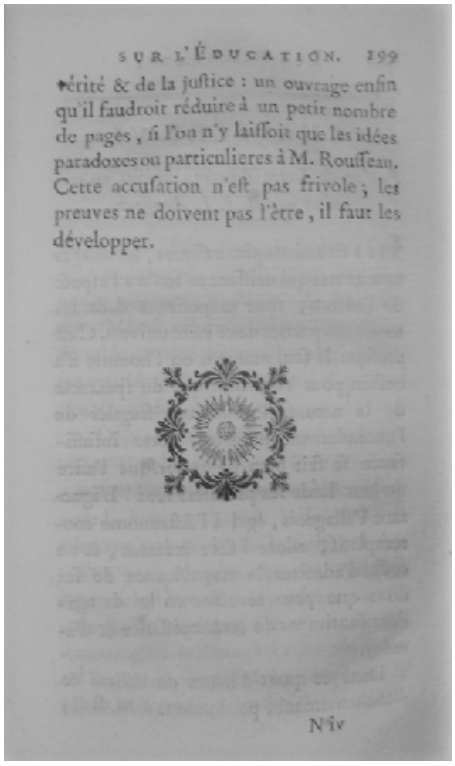


LES
PLAGIATS
DE M. J.J.R. DE GENEVE,
SUR
L'ÉDUCATION.

Grandia verba ubi sunt? si vires, cece nega.
MARTIAL. L. 1. Epig.

D. J. C. B.

A LA HAYE;
Et se trouve à Paris,
Chez DURAND, Libraire, rue S. Jacques, à la Sagesse.
M. DCC. LXVI.



SUR L'ÉDUCATION. 199
vérité & de la justice : un ouvrage enfin qu'il faudroit réduire à un petit nombre de pages, si l'on n'y laissoit que les idées paradoxes ou particulieres à M. Rousseau. Cette accusation n'est pas frivole ; les preuves ne doivent pas l'être, il faut les développer.

N iv

【図版 7、8】】『教育に関するジュネーヴの J.J.R 氏の剽窃』

総 括 討 論

Discussion

小関武史（司会） まずは登壇者のあいだで、お互いに議論することがありますか。

坂倉裕治 今回は、早稲田大学が所蔵するコルヴェア文庫に収められた貴重書を中心に検討するということでした。雪嶋先生と福島先生は大きなところでお話をされ、私は小さなところでお話をしまして、コントラストがあったと思います。報告を準備しながら思ったのですが、もしかしたら、いちばん面白いところを私は逃してしまったかもしれないんですね。ひとえに知識、能力がないってことなのですけれど。貴族が集めた蔵書をめぐって興味深いのは、我々が知ってる古典作品の周辺にあったものがたくさん含まれていることだと思います。たとえば、ヴォルテールやルソーのような著述家の作品に対して、あるいは著者に対して、批判したり、揶揄したりするような小冊子（パンフレット）が当時たくさん出ていたのですが、その多くは、こんにち存在すら忘れられてしまっています。こうした小冊子が貴族の旧蔵書にはふんだんに含まれています。コルヴェア文庫には、単体のものに加えて、10 点から 20 点ほどの小冊子が本の形に綴じられているものも相当数収められています。合本されている小冊子に共通する特徴が認められるものもありますが、なぜ合本されているのか理由がわからない例もあります。いずれにしても、こうした、古典作品の周辺にあった資料をうまく活用できると、思想史研究のあり方そのものさえ変えてしまうようなインパクトがあるかもしれません。福島先生が研究されているフーリエ主義、サン＝シモン主義にかかわっても多数の小冊子が出ていますし、今回、雪嶋先生は、王権に対抗する政治的騒乱のなかで書かれた小冊子を多数とりあげられました。もちろん、書かれていることがすべて真実ではないわけで、ある種の偏りを持った文書ということになるかと思います。こうした小冊子をめぐって、なにかお考えがありますか。

雪嶋宏一 マザリナードについては、今回はじめて見ました。最初はどのようにしてこれを扱ったらいいのか、さっぱりわからなかったんですね。いろんなものを見ながら何が重要で何がそうではないのかっていうことを少しずつ学んでいくなかで、マザランに対する批判文書、嘲笑するような文書、逆にマザランを擁護する文書があるのをみて、本当にこれほど自由にものが言えるものなのか、と思いました。こうした様々な文書を素早く印刷し、流通させてしまう、フランスのたくましさ、こういう素地があって後にフランス革命が起きるのかな、などとも思います。フロンドの乱も一種の革命って言われてますけれどもね。そんなことが垣間見えたような気がしますね。

坂倉 自分の研究には活かせなかったんですけれども、私も同じような印象を持ちました。卑近な例で申しますと、映画館で上映された作品がある程度社会的にインパクトを与えると、ファンの方たちが勝手にサイドストーリーなどをつくったりして、なかには高く評価されるようなものもでてきて、そうした二次創作の周辺でさらに作品がつくられるといった状況があるのと

よく似てるような気がするんです。古典籍の世界でも、有名な著述家が書いたものなど、ある種の正統性を持った言説の周りに、もっとくだけた作品があり、さらに、私が研究している海賊版ですと、元々の作品と断罪文書などが合本された形でつくられたりするんです。批判書、嘲笑文書なども含めて元の作品を売ろうというようなしたたかな意図さえ、垣間見られるように思います。雪嶋先生がおっしゃったように、擁護する立場、反論する立場、ちゃかす立場など、いろいろな立場から書かれた文書が雑多な形で一つのコレクションを形成している様は、まさに、こんにち、サブカルチャー的な作品を、二次創作も含めてファンの人たちが集めている状況と酷似していると思います。19 世紀はいかがでしょうか。

福島知己　お話を聞きながら、同じようなことを考えていました。もちろん、19 世紀に入ると、大量生産の時代になっていきますから、紙の作り方からして変わってきます。流通しやすくなる、出版しやすくなるっていうところはあるのでしょう。ですから、現代との比較でいうと、19 世紀の方がわかりやすいところがあって、逆に 16 世紀、17 世紀、18 世紀あたりで、まさにマザリナードなどとか、一気に小冊子がいっぱい出てくるようになるのは、すごく面白い現象だし、もちろんそれが 19 世紀でも似たことが起こってるっていうのも面白いですよね。ところで、コルヴェア文庫に含まれるこうした文献は、文庫という形だからまとまって入ってきたわけで、さすがに何か 1 冊だけだったとしたら買わないんですよね。研究者の方では、どうせそんなもの日本にはないだろうと思い込んでいて、わざわざフランスに行って調べてくるわけですけれど、そしてそれはそれで、他のものもたくさん見られるから有益ではあるんですけど、実は、日本でこれだけまとまって見られるっていうのはすごいことなんです。新しい研究のスタイルっていう意味で言えば、いいことですよね。フーリエの作品にせよ、フーリエ主義関連の文献にせよ、かなりたくさんあると思いました。ところで、雪嶋先生、坂倉先生のご報告で、「コピーに基づく」という表記があったのですが、それはどういうことでしょうか。海賊版だって自ら言ってるような話なんですかね。

坂倉　18 世紀でも、そのような表記がタイトル・ページに見られますね。私が調べたケースでは、それが海賊版ではなかったところが面白かったんです。アムステルダムのネオームが制作したルソーの『エミール』で、流通が始まるときにはすでにパリ版が断罪されていたので、断罪を逃れるために、タイトル・ページを差しかえて「パリ版のコピーに基づく」と記したものでした[1]。ネオームはルソーの同意を得て、パリの業者と制作費用を按分する契約を交わしていて、契約にもとづいてパリ版の校正刷を回してもらって自らの版を制作しました。他にも、色々なケースがあるのかもしれませんが。

雪嶋　18 世紀と 17 世紀では、たぶん同じではないかもしれないんですけれども、マザリナードの場合は、やはり、まずパリで印刷されたものが圧倒的に多く、後にそれを他の場所でも印刷したっていうことだと思うんですね。18 世紀になると、パリで印刷できないので、よそで

---

[1] 坂倉裕治「『エミール』の初版本認定指標」『名古屋大学附属図書館研究年報』第 15 号、2018 年 3 月、5 頁、参照。

印刷してパリに運んでくるといった、別のベクトルになっているんじゃないかと思います。そこはその時々の権力構造の違いということじゃないかと思いますね。

坂倉　いつ頃から嘘の出版地を記すことが普通になったんですかね。18 世紀については、フランス語の本の出版地はほとんど嘘だと思わないといけないぐらいな状況です。フランス革命以降は事情が変わって、ほぼちゃんとした出版地が記されるようになるんですけれど。18 世紀にいきなり始まったわけではないと思うのですが。

雪嶋　たぶんプロテスタントとの関係ですね。16 世紀になると、特にフランスの場合、カルヴァンの作品がリヨンでたくさん印刷されているんですけれども、リヨンとは書かないで全然違う出版地を記したものがあります。それが、多分始まりかなと思いますね。

坂倉　たしかに、フランス国内ではプロテスタント信仰を後押しするような本は一切禁止でしたね。刷ってもいけないし、外国から持ち込んでもいけない、捕まれば重罪でしたから、フランス国内で作るとしたら嘘の出版地を記さなければ危険ですね。そうすると、宗教改革以降、フランスでは嘘の出版地表記が普通に見られるようになったのでしょうか。

雪嶋　普通なのかどうかはさておき、リヨンではそのようなものが出ています。

坂倉　なるほど。これは以前、松波さんに伺ったように思うのですが、イギリスでは嘘の出版地を記すことはほとんどないのですよね。

松波京子　そうですね。17 世紀以降のイギリスは、フランスと比較して事前検閲・出版許可というものはゆるやかになっていきますので、本当にフランスの出版事情は面白いと思います。

坂倉　おそらくは、宗教的な問題があるんでしょうね。イギリスでは宗教的寛容の問題が比較的早い段階から出てくるのに対して、フランスはオフィシャルにはカトリック信仰だけを重んじてプロテスタントは徹底的に排除するということがあったので、その辺りの事情というのがまず一つあるんでしょうね。

松波　はい、当然あるかと思います。17 世紀だとやはり名誉革命とか、イギリスの場合は結構重要な時代を迎えていくんですけれども、このあたりは多分長尾先生の方が思想史的には詳しいかと思うんですけれども、この時代はそういう言論を封じ込めようという雰囲気ではないですよね。

長尾伸一　イギリスでも、検閲が完全になくなったわけではないと思います。17 世紀になっても、過激思想に対する取り締まりや投獄もありますし、18 世紀でもそれは残っていいて、現代のような言論の自由ではありませんでした。また、カトリック信仰がまったく自由であったかというと、それは疑問に思います。特に名誉革命以降、カトリック以外のプロテスタント系の信仰は許されていました。それにはいろんな宗派がありました。国教会体制はピューリタン革命のときに潰されます。国教会によって国王が中央集権的に教会をまとめようとしたのですが、失敗して国教会体制が崩壊して、王政復古から名誉革命以降は、もうどうでもいいというか、カトリックや無神論でなければ何でもいいんだと、そういうふうになっていくので、厳格な宗教的信条に基づく取り締まりがなくなっていきます。たとえば、学術出版であれば、ロ

ンドンの王立協会は出版権を持っていて自分たちで出版できる、というように自由になっていくんですね。だから、完全に自由だとは思わないですけれども、フランスから見れば明らかに自由な体制になっていく。それから世論があります。もちろん世論はフランスにもあるんですけども、イギリスでは議会が開かれるので、そこでの議論、法案がすぐに新聞に出ます。字の読めない人も、コーヒーハウスや居酒屋などで読んでくれる人がいて、伝わっていくんですよね。そういう世界になっていくので、明らかにフランスと比べれば遥かに自由なので、フランスのように地下出版を頑張らなきゃならないという事情はまったくないわけですね。完全に自由というわけではないんですけれども。ただ、今のお話で大変面白かったのは、ケンブリッジ学派でアメリカで活躍したポーコックという政治思想史家が、イギリスは出版文化であって言論の文化で、論争の文化であるというんですね。彼はそのために、研究方法としては論争史、言説史を採る。それはイギリスの思想に、あるいはアメリカの思想に応用できるというんですね。彼は触れていないのですが、それは17世紀フランスでもあるじゃないかと思うんですね。お話をきくと、むしろフランスの方が盛んじゃないかとも思うんです。それで、いろいろ有象無象の出版物が出てきているっていうことなんでしょう。

坂倉　このパンフレット（小冊子）というのは、通常我々が想像する本とは若干違うんですね。雪嶋先生がお話しされましたけど、簡便に作ってすばやく流通させ、瞬く間に消えていくっていうタイプのもので、しっかり作って何年もかけてじっくり売っていくタイプの本とは、作り方も流通の仕方も違うんだと思うんです。こんにち、文庫というまとまった形で見ると、出版物としてひとくくりにしてしまうのだけれども、やっぱりジャンルとして違うものだった可能性がありますよね。それから、雑誌の話も出ましたが、定期刊行物のありようっていうのもすごく問題があって、やはり刊本と定期刊行物、雑誌の類は、別のものだと思うんですね。さらにその雑誌というのが、フランスの場合には、印刷されたもののほかに、多分写し間違いなんかも含みながら流通していった手書きのタイプのものも存在しています。コルヴェア文庫には、あまり手書きのものは入っていないのですが。

雪嶋　確かにコルヴェア文庫には手書きのものはないですね。

坂倉　そういう手書きのタイプの定期刊行物もフランスでは比較的ありましたから、そういう意味で言うとなかなか厄介というか、複雑なもののような気はしますけどね。

長尾　手書きでの流通ということは、ヨーロッパに普通にありますね。同時代の東アジアは刊本主義、活字にしなければいけないということでしたね。中国なんかそうなんだそうですけど。日本もある程度、手書きのものが流通しました。イギリスでも当然手書きで非常に重要なものも、どんどん回ってるんですけれど、流通の範囲はもちろん非常に狭いんですね。やはりそれはヨーロッパ的現象なのかなと思いますね。

坂倉　あと、現物を見たことはありませんが、携帯印刷機というのがあって、ある程度のもの

は印刷できたようです[2]。ただそれがどの程度のものなのかとか、これでつくられたものと印刷工房で刷られたものでは何がどう違うのか、よくわかりません。革命前夜などにはそのような手段で反体制的なチラシなどがつくられたのかもしれません。

福島　携帯印刷機というのは、初めて聞いたんですけど、見てみたいですね。

坂倉　現物があれば本当に見てみたいんですけれど、どの程度のものがどのようなクオリティーでつくれるのか、私も本で読んだだけなので、これ以上わかりません。

長尾　現代との比較という話もありましたけれど、当時は、要するにその手書き流通もあれば、地下出版もあれば、さらに大学の講義も結構重要で、講義録が流通して残っているんですね。19 世紀にドイツではそれを売ったりするので、そういう流通もあります。本来の意味で出版された書物は価格が高くて、普通の人は買えないんですね。それがパンフレットだと安いので買えるから、すばやく流通して消えていく、そのかわり範囲は広いのですね。そのように、いろいろな範囲があるので、著者たちはそれを理解して使ってるんじゃないかと思うんですね。ちょうど我々が論文を書く場合と SNS で喋る場合と、講義で喋る場合は、いろいろ区別してやってると思うんですが、そういうメディアの多元性みたいなものがあったのではないかと思うんです。そういう意味では、現代と近いところがあって、メディアの多元性という観点から見ていくことが大切かと思います。著述家たちはそれを自覚したうえで書いていたはずです。

坂倉　そのとおりだと思うのは、たとえばヴォルテールのばあい、本として出版する作品の他にも、大量の小冊子を書いていて、その印刷を依頼する業者にも特徴があるようです。

小関　ここでフロアから質問のチャットがありましたので、読み上げましょう。「国内にもたくさんの貴重な資料が所蔵されていて、今回のお話のように様々な研究に活用されていることがわかり、大変興味深かったです。今後それらの資料も含めた貴重書を研究者に有効に活用してもらうためには何が課題になると考えられますでしょうか。」この質問を受けて何か思うところがあればぜひお願いします。

坂倉　学生の頃は、どの版本でも中身が読めればいいというふうに考えていました。思想史から研究の世界に入りましたので、いわば、本の精神とか魂とか、本の中身の方に関心があったのですけれども、いろいろご縁があって、近年は本の身体、物としての側面も重要だということがわかってきました。私の場合には、「リヨンで作られた海賊版」というくくりで本を探したいと思っているのですが、どの版がどの大学にあるのかは、現在の OPAC 上では必ずしもよくわからないんですね。今回の報告では、早稲田のコルヴェア文庫を中心にすると言いながら、実際にはこの文庫だけではなく、慶應義塾大学、一橋大学、名古屋大学など、複数の大学

---

[2]「家具のなかにしまっておくこともできる小型の携帯印刷機（*petites pressses portatives*）によって誰でも音をたてることもなく自分で印刷することができるのである。現在、パリには 100 を超える数があるのは確かだという。許可されない書物の売れ行きから必要とあらば、その数はさらに増えるであろう」（Lamoignon de Malesherbes, *Mémoire sur la liberté de la presse*, Paris : Pillet, 1814, p. 61.）。王権による出版統制の責任者であった人物によるこの論考の概要、書かれた経緯については次を参照。木崎喜代治『マルゼルブ』岩波書店、1986 年、184-201 頁。　.

の蔵書を組み合わせていくことで、点と点の間の密度が高まっていって面白くなる、というお話をさせていただきました。様々な機関で所蔵されている資料がどういう版なのか、研究者の側から見て分かるようになるとありがたいです。たとえば、フランス語の本の場合、発行地がロンドンと書いてあっても、実際にはフランス国内で刷られていたりするんですね。ロンドンとあるけれども実際にはリヨンで刷られたという情報が括弧書きで出てくると、助かるわけです。それは現状では難しいのですが。ただ、せめて、備考欄などで研究者からのフィードバックを随時入れられるような仕組みを大学図書館共通で構築していただけると、その情報をたどりながら研究者が必要な情報をより引き出しやすくなるかと思います。それが、詳細な書誌をとって校合式まで記さなければいけないということになると、それは到底実現できないでしょう。

雪嶋　日本の図書館の OPAC であまり整備されていないのが、典拠となる資料との対照なんですね。典拠となる目録では一つ一つの資料に番号が与えられている場合もあれば、そうではない場合もありますが、典拠となるべき目録の存在を知らないでつくられている書誌もあります。この点で整合性がとれていないんですね。たとえばマザリナードについては、モローの目録[3]の番号が入力されていれば、簡単に資料が同定できます。フランスのマザラン図書館やアルスナル図書館であれば、こうした番号はすべて入力されています。こうした番号は、検索できる項目に入力されていないと、うまく機能しません。これを実現するのはそれほど難しいことではありません。

坂倉　たしかに、それぞれの対象に対して、その典拠となる大きな目録があれば、その番号さえ書いておいてくれれば、研究者は版を特定できます。ただ、それも絶対ではないと思ったのは、フランスの国立図書館などでも間違った番号を入れてしまっている例をいくつも発見しました。とはいえ、こちらが間違いを指摘すると、すぐに訂正してくれるんですね。このような仕組みは日本ではまだまだ難しいのかなと思います。典拠となる書誌と対照をつけていただくのは大切ですが、大量にものを扱ってると、間違いは必ず起こるんですね。

長尾　この研究グループが主催した前回のシンポジウムでは、高野彰さんという書誌学に大変詳しい方においでいただいたんですが、「18 世紀ぐらいまでの本には同じものは二つとない」と言われました。大変な名言、まさにその通りで、同じ出版社が出した同じ版でも違うところがあるわけです。物理的に同じものはないのです。それぞれに歴史を背負って今目の前に 1 冊の古書としてあるわけです。ところが現在の情報の捉え方は、デジタルなものは全部複製できるものですから、それと同じように捉えちゃってるんですね。どうしてもそういう傾向が強くなってきていて、図書館の管理でもそういう傾向はあって、OCR でデータをとれば元の本は捨ててもいいだろう、ということになってしまいます。それは間違いなんで、一つ一つの物理的な存在としてのそれぞれの本が重要で、その情報が書誌からわかるようであって欲しいので

---

[3] 本書 p. 25、および p. 36 注 10-11 参照。

す。完全には非常に難しいので、できるだけってことなんですが。究極的な目標はそれなんでしょうね。

坂倉　長尾先生がおっしゃったようなことがなぜ重要かというと、たとえば、今回私が扱ったエルヴェシウスは教会権力に逆らうようなことを書いてしまったので、問題となる部分が差し替えによって消されていくんです。差し替えの程度が本によって違うっていうところが問題になるんですね。同じ版本とみられる本でも、差し替えがどこまで進んでるのかを知るためには、さしあたり目録上は校合式しかないんですね。けれども、なかなか校合式までとっていられないという現実があります。まして海賊版は、それほどの価値はない本と思われがちなもんですから。そういうところで言うと、理想と現実のギャップは大きくて、現実的にどういうふうにそれを埋めていけるのかっていうことがありますね。

長尾　図書館は、たとえば国立大学であれば国有財産を管理するのだ、というふうに大学執行部は思うんだろうけれども、それではいけないんですね。研究のために本を持ってるわけですけれども、同じ本が2冊あったら無駄でしょと、そういうふうになるんですね。でも、決してそうではない。もちろん20世紀になれば、特別の書き込みでもなければ、確かに同じ本があれば捨ててもいいかもしれないけれども、少なくとも18世紀までは基本的に全部保管しなきゃいけない。同じ版のものが何冊かあって、そこから見つかることがいろいろあるんですね。だからそういう意味で、ちょうど化石標本のばあいと同じように、物理的に本を保管するということ、同時にそのデータも。もちろんこれは手間がかかって大変なので、理想的なことを言えば全部ってことですけども、できる限り公開していただきたいし、目録に載せていただきたい。研究者が見つけたことは書いてほしいと思います。先ほどの備考欄に書いていただくとか、それはしていただけるとありがたいなと思うので。その辺からちょっと少しずつあまりお金がかからず、手間のかからない方法で改善できたり、早稲田のコルヴェア文庫は大変立派で重要なコレクションなので、単独でカタログを作らなきゃいけないはずのものだと思いますね。できる範囲内で優先順位をやっていくということが重要だと思います。

坂倉　なかなか難しいと思うのは、今回は我々は刊本、いわゆる本の形をしたものを主に問題にしたんですけれど、コルヴェア文庫には、数千点に及ぶ紙片があるんです。ポスターとか、革命期の張り紙みたいなものがあって、どうやって目録化するのか、非常に手間がかかるんですね。コレクション全体で約1万点、そのうち7000点ぐらいが現在OPACに載ってるっていうことの意味は、とにかく本の形をしたものは何とかしようということで頑張って入力して下さったのですけど、そして、本の形をしてるものについても、先ほど触れたように小冊子を合本したものがあったりして大変なんですけれど、1枚ものの紙片については、まだまだこれからです。それから、先程、福島先生のお話にあったように、コルヴェア文庫については、扱った古書店商が詳細な書誌をとっていたということがあって、それが現在我々が利用しているOPACにも反映されています。たとえば、私の報告の最後の方で触れた、ルソーの『エミール』に対する批判文書、実はコルヴェア文庫に2冊入ってるんです。ただ1冊は、タイトル・ペー

ジだけ差しかえられていて、まったく違う題目になっています。差しかえられたページの紙は、明らかにフランス革命期のものなんですね。題目も変わっていますから、一見すると全く別の作品なんですけれど、中身は同じです。なぜ発見できたかというと、ゲーリッツなのかベルンシュタインなのかはわかりませんが、福島先生の報告にあった図書カードに記されていた注記を、OPAC に入れるときに拾ってもらえたからです。同じ本が 2 冊あるから 1 冊は捨ててもよい、と言われても、このような事例もあるので、そうそう同意するわけにはいきませんね。

松波　手紙とか一葉ものについては、図書館員さんで目録を担当されてる方は多分ご存知のはずなんですが、登録の仕方があります。早稲田大学、慶應義塾大学の OPAC のシステムは国立大学等とは少し違うのでわからないんですけれども。1 枚ものでも、何らかの形で最低限の情報が載っていれば、研究者が調べるときにヒットする可能性があるので、とにかく登録をしていただきたいと思います。それから、研究者が刊本をこの版である、と確定するためには現物を見に行かなきゃいけないということがあるんですけれども、私がここ数年研究している中でちょっと感じているのは、現物にアクセスすることが困難だということです。たとえば学外者には現物の利用をなかなか許可してくれない大学もあるというのが現実なんですね。本日はせっかく図書館の関係の方がたくさんいらっしゃっているので、学外者に対する現物へのアクセスについて、もう少し閲覧制限を見直していただきたいです。また、刊本の版を確定するためには、いろいろな情報を集めなきゃいけないんですけれども、たとえばイギリスとか、あと国内の一部の大学では、個人の研究に使用目的を限定して、デジタル・カメラでの撮影を許して下さる図書館もあります。特に海外では、コピーをとるよりも撮影の方が資料の破損を防ぐにはよいという考え方が広まっていて、撮影させてくれるところが増えています。日本国内では、それを許していただけない大学もかなりあって、たとえば、坂倉先生の報告では、かなり凝ったイニシャルの図版がありましたし、雪嶋先生のご報告ではタイトル・ページに銅版画がある図版がありましたが、ああいうものは、写真撮影してしまえば確実に比較できるんですが、そうでないと、私達では描写できないんですね。ですから、特に図像については写真撮影させていただきたいと思うんですね。写真を比較することによって、印刷した工房が同じかどうかといった研究も充実してくるんですね。あらゆる刊本をデータ化してアップロードすることはできないという前提がある以上、できれば利便性をもう少し上げていただきたいです。研究者たちが現物にアクセスしやすい環境となるよう、ぜひ検討していただきたいです。

坂倉　いまの松波さんの発言には賛成でもあり反対でもあるんですね。というのは、やはり図書館の第一の責務は、資料を保存し、次世代に伝えることですよね。それを前提に、利用者にどれだけ便宜をはかれるか、っていう順番だと思うんです。こういう研究をやってる研究者としては、変なことはしないぞっていう信念を持っているはずなんですけれど、すべての利用者がそうなのかは、図書館の側からはわからないんですね。私もフランスの図書館で作業すると、はじめの 1 週間ほどは、それは駄目、これも駄目、とかなりひどい目に遭います。ところが、1 週間毎日毎日同じ図書館に通って作業をしていると、こいつは大丈夫だってなって、そこか

ら先は何でもOKなんですね、フランスでは。偉い人が奥から出てきて、お前には特別の席を用意してやる、ここでだったらお前のやりたいことを何でもやっていいと言ってくれるんです。そこからが本当の勝負なんですね。フランスでは、ある地位にある人の裁定が、一般的なルールから外れて特段の便宜を特定の利用者に提供するための調整弁になってるようなところがあるんです。日本の図書館で、どこまでそういうことができるでしょうか。ルールがあるとして、ある立場の人がそのルールから外れる便宜を提供する権限があるのか、これは非常に難しいのではないでしょうか。

松波　今年ブリティッシュ・ライブラリーに行ってきた際には、ちょっと数年前と違う感じになっていました。エリアが分かれていて、やはり保存しなければならない資料に関しては写真撮影禁止で、特定の閲覧エリアでしかみてはいけませんというようになっていて、他のカテゴリーの本は別のエリアでパソコンやカメラを持ち込んでよいことになっていて、写真撮影できました。もちろん資料保存は優先ですが、撮影に耐えられる資料であれば、少しボーダーを下げていただけるとありがたいですね。

坂倉　松波さんが言われたことに賛成ということの意味は、今回のシンポジウムの準備で苦労したのは、自分が勤めてる大学なんですけど、早稲田の図書館では、利用者による撮影は一切許してもらえないんですね。業者さんに写真撮影をお願いするしかない。自分で写真を撮ってはいけないというルールの図書館では、それを尊重しないといけないんですね。たとえば、慶應義塾や名古屋大学では、かなり自由に撮らせてくれまして。かつては考えられなかったことですが、フランスの国立図書館もデジタル・カメラでの撮影が可能になっています。ところで、今回の科研の研究、シンポジウムの準備では、信頼関係に基づいて、例外的な便宜をはかっていただきました。ふつう、貴重書については、1冊出してもらってそれ見て、それ返すと次の本を出してもらえるって仕組みのところが多いと思います。今回、早稲田の図書館では、まとまった数の本をいっぺんに出してもらえるようにしていただきました。誰に対しても同じようにできるかというと、とても難しいところです。我々としては、ある程度まとめて出してもらわないと、一点一点やってたのではとてもではないけれど日が暮れてしまうっていうところがあって。そのあたり、大きなルールと小さいルールをうまく使い分けていくような仕組みができてきて、たとえば、ある程度、貴重書の現物を活用した研究の実績がある研究者については、他の利用者一般とは別のルールを適用するといった仕組みをつくっていただけるとありがたいです。すべての利用者に対して一律のルールということではなく、何らか形で仕分けをするような仕組みを導入しないと、なかなかうまくいかないのかなと思います。

長尾　閲覧については、一度に複数の資料を見るというのはどうしても必要なんですよ。20冊とは言いませんので、2冊3冊でもいいんですけれども、一度に出していただけると本当に助かるんですね。

坂倉　やっぱり100冊ですね、こういう研究をやろうとすると。

雪嶋　いや、今回はそういうことなんですけど、ふだんはそんなたくさん見ることはないで

す。やっぱり対象になるものは数冊で、それをじっくりと見ている方が多いですけども、今回はちょっと特殊な例ですね。まとめて全部出していただく。そうでないとどうにもまとまりがつかず、比較もできないということだったので。無理をいってまとめて出していただいたということで、大変感謝しています。

坂倉　以前、松波さんにご迷惑をかけて、名古屋大学では伺う度に貴重書を 100 冊ぐらいまとめて出してもらって、貴重書の保管のために、温度や湿度が厳格に管理されている、もう凍えそうなくらい、冷蔵庫に入ってるように寒い部屋で見せていただいたのを覚えています。100 冊なんて普通は出してもらえませんよね。

松波　そうですね。いまでは名古屋大学では図書館所属の身分ではなくなってしまいましたので、そのようなことも多分無理になってしまったかなと思います。こういう研究をするのでご協力いただけませんかとお願いするときに、検討・対応していただけるようなスタンスを大学図書館に持っていただけると、本当にありがたいですね。たとえば、雪嶋先生のご報告にもありましたが、現代の人がコレクションに確実に関わってるということが外装からわかるのは面白いですね。装丁からわかることも多いのですが、数十冊、あるは 100 冊 200 冊という単位じゃないとわからないっていうこともあるので、そういう研究もあるということを知っていただいて、ご検討いただけるようになるとありがたいです。

長尾　現在の思想史研究の一つの特徴としては、コンテキスト（文脈）を重視するということがあります。特定の本の中になにが書いてあるか、という点については、有名な本については従来から研究してきたわけですが、それだけではなくて、それがどういう形でつくられ、流通したのか、あるいはひょっとしたら現代の収集者がどうまとめたのかとか、そういうことがすごく大切になってくるんです。そういう意味で、一つの物理的存在である一つの本が、誰がつくったのか、誰が集めたのか、それを今度誰がまとめて大学に売ったのか、そこまで含めてその全体の歴史ですよね、そういうことが思想史に深く関わってきているんです。そこが昔の思想史と少し違うところなので、その辺の情報を研究者は知りたいのですし、研究者がなにか発見したら、それを目録に反映させていただくことで、さらに研究が発展するわけです。本に書かれた内容を OCR で読み込んで電子データにして配布しておしまい、そういうことにはまったくならない、そういう次元を超えてるんですね、思想史研究自体が。そういう意味で、なんとか物理的な本の扱いということで提供していただけないというふうにいつも思います。

小関　フロアから手があがっていますね。どうぞご発言ください。

フロア　私立大学の図書館に勤務しています。本日はお話ありがとうございました。図書館の現場の声ということで、少しお話をさせていただければと思います。本学の初代学長のコレクション文庫について、冊子体の目録は出しているのですが、OPAC での公開がまだできていません。ずっと以前から気になっていて、予算申請や補助金も検討しているんですけれども、なかなかできなくて、通常の作業内で取り組んでいるところなんです。それで、自分がその目録を依頼する立場なんですけど、依頼するレベルですね、そこでやはり研究者の方との認識の差

が少しあったなっていうところで、本日のお話を伺いながら反省しているところなんです。やはり早く公開したいっていう思いもあり、ただ、やはり研究に資する情報じゃなければいけないっていうのもあり、そのあたりの兼ねあいで、どうしても共同書誌のNACSISに頼りつつ、やはりオリジナルな部分は可能な限り入れるっていうところでやっているんですけれども。その図書館員も、大学職員としての異動も多くありまして、なかなか専門性も担保できないところもあり、現場としてはそういう苦しい事情のなかでやっているんですけれども、先生方の方からこういった資料にこういう情報があるとおっしゃっていただければ、データの中に付け加えることができます。そういうふうにおっしゃっていただけることが、図書館員としては、特に本学のような小規模の図書館の図書館員としては、ありがたいと思いますので、ぜひ研究者の先生方と一緒になって作り上げていけたらいいなと今日のお話をお聞きして思いました。

坂倉　どうもありがとうございました。おっしゃる通りだと思うんです。予算がつけば人もいくらでも雇えるんですけど、通常の業務の中でやっていくのはすごく大変だっていうところでいうと、まずは最低限の情報でOPACに上げてもらうのが第1段階で、次に本が実際に利用されたときに研究者からのフィードバックを目録に反映していただく中で少しずつ情報の精度が上がっていくっていう筋道がおそらく現実的だと思います。

福島　最初から詳細な目録を作るのではなくて、できるところから表に少しでも出すっていうことですね。本当にその通りだと思います。僕も今の大学をクビになったらそういう仕事をしてみたいです。

フロア　ありがとうございます。今のお言葉を聞いて少し安心したところもあるんですけれども、日々頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

一同　よろしくお願いします。

小関　さてどうでしょうか。あと一つぐらい話題があってもいいですし、もうそろそろしめてもいいんですが、どうなさいますか。

福島　図書館の方に一つだけお願いがあるんですけど、「本見せてください」とお願いしたときに、「電子版が出てますので、そちらをご覧ください」って言われることが最近多いんですね。もちろん、テキストだけ見ればいいっていう方はそれでいいんですが、先ほども申し上げたように、実物が見たいんです。たいていは実物が見たいと言えば見せていただけるので、もちろんそれでいいんですけれども、その点、よろしくお願いいたします。

坂倉　そうですね。ぜひお願いしたいのは、実物じゃないとできない研究もあるんだっていうことは、こちらも一生懸命説明しますので、ぜひご理解いただけると、各大学で対応していただけるとありがたいです。規則で駄目ですって言われちゃっうと、もうどうしようもないんですよね。

小関　でも、それも多分、図書館の側からすると、電子媒体の方を好む研究者もいるからこその一言っていうこともありうるので、事情がわかって現物をどうしても見たいっていう意向が確認できたら、ぜひお見せいただければと思います。

雪嶋　フランスの国立図書館に何回も行っているんですけれど、デジタル・アーカイブのGallicaにデータがあると、貴重書は閲覧させてくれないんですよね。非常に困りまして、なんとか見せてくれないかってお願いしても、やっぱり駄目ですって言われるんですね。

坂倉　パリの国立図書館では、その本の紙の透かしを見ないといけないっていうと、Gallicaにあがっていても、現物を閲覧できます。それから、本日の報告では警察記録に触れました。手書き文書ですが、この種の資料もGallicaにもかなりあがっていますから、現物は出してもらえないんですね。ところが、Gallicaで提供されている画像のなかには、昔のマイクロフィッシュをスキャンしてるだけのものがあって、それをパソコンの画面で拡大しても、つぶれてしまって文字が判読できないんです。それで、見たい資料をあらかじめダウンロードしておいて、パソコンで見るとこういう感じだっていうのを図書館の人に一つ一つ確認していただくと、さすがにこれじゃ読めないよねっていうことになって、窓口から問い合わせをしていただいて、結局は出してくれるんですが、閲覧を申し込んでから閲覧許可をもらうまでに、半日かかってしまうんです。それを毎日毎日、リシュリュー通りにある国立図書館で1週間くりかえしたんです。1週間毎日同じことをやって、次の週からははいきなり現物にアクセスできるようになりました。やはりそこは、研究者の側が根気強くやるしかないんじゃないかと思います。

長尾　実物、実物とさんざん言っていますが、電子媒体は役に立たないのか、というとそうではないんですね。私も前書いた本はほとんど電子媒体でやったんで。全文検索ができる、ものすごく新しいことができるわけです。それは素晴らしい。決して実物の本を使った研究と電子媒体を使った研究は対立するものではないので、両方が相互に結びついていくのが非常に生産的なので、そういう意味では我々は別に電子媒体に反対しているのではありません。それはそれで、どんどん進めていただきたいんですけど、それだけでは駄目なんですね。そこからさらに進んで、コンテキスト（文脈）を調べていくというときに、どうしても実物が非常に重要になるんで、そういう意味で車の両輪みたいなものであるというふうに図書館の皆さんにも理解していただきたいなと思います。

坂倉　そのとおりだと思うのは、今回雪嶋先生がお仕事されてるのを横で見ていて、マザリナードだけを選んで、本の背中があれだけ壮観に見えるっていうことの意味は、やはり大きいと思いました。物として。あれは、OPACの情報だけではわからないですね、

雪嶋　まったくわからない。何と何が合本されているのかっていうことも、OPACではほとんど理解ができないです。

坂倉　理解できないですよね。あとOPACで拾えてない、ページにはさまっていたペラの紙が出てきたと伺って、ちょっとびっくりしましたけど。もしかしたら、合本になっている細かいものって拾われてないこともありますよね。

雪嶋　今回いくつも見つけてますね。

坂倉　はい。だから、それはもうやむを得ないことで。

雪嶋　実際に現物を見てみるとですね、これはこっちの続きなのかどうかっていうこともなか

なか判断できないようなものなんですね。タイトル・ページが欠けているとか。これは明らかに別物だっていうのは、折丁や活字を見ればわかるんですけれども。その辺、判断はなかなか難しいと思います。

小関　そろそろ時間も迫ってまいりましたので、この辺りで今日のシンポジウムを終わりにしたいと思います。長い時間お付き合いいただきましてどうもありがとうございました。多くの研究者、図書館職員の皆さんとの間で意見の交換ができたということを大変嬉しく思います。今後も引き続きこういう場が設けられればと思いますので、皆さん、ぜひご参加ください。どうもありがとうございました。

福島　知己　Tomomi FUKUSHIMA
帝京大学経済学部准教授
Associate Professor, Faculty of Economics, Teikyo University

雪嶋　宏一　Koichi YUKISHIMA
早稲田大学名誉教授（シンポジウム開催時 早稲田大学教育・総合科学学術院教授）
Professor Emeritus, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University

坂倉　裕治　Yuji SAKAKURA
早稲田大学教育・総合科学学術院教授
Professor, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University

小関　武史　Takeshi KOSEKI
一橋大学大学院言語社会研究科教授
Professor, Graduate School of Language and Society, Hitotsubashi University

長尾　伸一　Shinichi NAGAO
名古屋大学名誉教授
Honorary Professor, Nagoya University

松波　京子　Kyoko MATSUNAMI
名古屋大学大学院経済学研究科招へい教員；名古屋大学附属図書館研究開発室研究協力者
Visiting Faculty Member, Graduate School of Economics, Nagoya University ;
Research Collaborator, Research & Development Office, Nagoya University Library

一橋大学社会科学古典資料センター　*Study Series. No. 81*
発行所　東京都国立市中２－１
一橋大学社会科学古典資料センター
発行日　2024年2月29日
制　作　株式会社トリッド